



イリスとセルキー。  
—友情のアイスエッジ—



完・全・版

妖魔・木海月

## 氷雪の民の伝説

---

ここは冒険者が存在しない2年前のジエンディアの主要都市エリアス。今と違い、冒険者が町でたむろしていなければ、空港ができておらず、未だアガシュラの脅威が知られていなかった時代……そのアガシュラの脅威と戦った一人の少女と仲間たちの物語——。

エリアスにたどり着いたイリスとムーウェンは、当時のコロシラムの覇者であったカズノ・ナスと共に赤き魔龍『インヴォーグ』。その魔龍を裏で操り、アガシュラに与して国家転覆を狙った北群。アガシュラの命でガマガエル島より現れた3体の『ガマストロング』を打ち倒し、アガシュラがいかに危険な存在かをエリアス国王ラジャータに認識させた。

ラジャータはイリスたちに信頼の証として、異国の地へ赴いていた騎士団長を呼び戻し、同行させる事を決意する。だが、彼が戻ってくるまで1週間はかかるとラジャータに言われ、イリスたちは実質足止めを食う事になってしまった。

しかし、ガマストロング達により深手を負ったカズノの看病に充てる時間、そして何より魅力的なエリアスを堪能する時間としてイリス達は割り切り、久々にのんびりとした生活を送っていた。

「ふう……なんか久々だなあこういうの。ね、ムーウェン？」

「そうだねえ～。ベロスを出てからずっとずっと忙しかったから、なんだか肩が少し軽くなった気がするよ」

エリアスの宿屋のベッドの上で、イリスたちが久々にゆったりとした時間を堪能している傍らで、少し離れたベッドの上で傷だらけのカズノが二人とたしなめるように声をあげる。

「フッ……最初から飛ばしすぎるとすぐに折れちまうからな、今のうちにしっかり休んでおくといいさ。まあ俺はこの様だから休むもへったくれもないがな……はあ」

エリアスで無敗を誇っていたカズノであったが、アガシュラと与した者たちの前では赤子同然のようにあしらわれる……屈辱のあまり、カズノは拳を強く握りしめていた。

カズノが落胆する様子を見て、イリスたちも少しシュンとなってしまったが、丁度いいタイミングで宿屋の主ハヌイ老人がお茶と茶菓子を持ってやって来た。

「失礼するよ」

「あっ、ハヌイおじいさん！ うわあ、おいしそうなお菓子……」

「ははは。王宮から御主らをもてなす様にと、直々に宮廷御用達の最高級のシナモン茶と菓子を賜ったのじゃよ。どうじゃ？ ちと早いがおやつにでもせぬか？」

「うわあ、ありがとうございます！」

「フッ……俺あ酒とジャンクフードのが好みだが、たまにはこういうのも悪くな

いな・・・・・・・・」

「いっただっきまーす！ うわあ、これすっごく美味しいよイリス！」

「本当だ！ このクッキーもとっても美味し・・・・・・・・」

「・・・イリス？」

少し早いおやつを堪能してイリスであったが、急に手を止めると塞ぎ込むように顔を俯かせた。その様を見て、ムーウェンが不思議そうに尋ねるが、イリスは黙ったままであった。

「どうかしたのか？ 遠慮せずに食べていいんじゃないぞ？」

「いつもは呆れるほど食べるお前らしくないなイリス。体調が悪いのか？」

「ううん、そうじゃないの・・・ただ、ほんの2週間前にはこうしておばあちゃんと過ごしてたなあって思い出しちゃって・・・・・・・・」

「あっ・・・」

イリスの脳裏に、ベロスの自宅で祖母と楽しくおやつを食べていた記憶が鮮やかに蘇る。それと同時に、イリスの瞳からじわりと涙が滲み、やがて一筋の涙となって零れ落ちた。

そして、次第に重い空気が漂い始める・・・・・・・・カズノは神妙な面持ちでイリスにハンカチを差し出す。

「カズノ・・・さん？」

「カズノで良いっていつも言ってるだろ・・・それは置いといてだ。

別に忘れろとか、思い出すなとか言うつもりはねえ。ただ、そんな顔してちゃあお前のお婆さんも安心して天国に行けないだろ？

今を精一杯楽しんで生きて、お前の元気な姿をお婆さんに見せてやれ・・・な？」

「・・・うん。ありがとう、カズノさん」

イリスはカズノからハンカチを受け取ると涙をぬぐい、ぎこちない笑顔を見せた。先ほどよりは良くなったものの、相変わらず空気が重い・・・そう感じたハヌイは場の空気を変えようと声を出す。

「オホン！ そうじゃ、せっかくじゃしワシの昔話でも聞かせてあげよう」

「昔話・・・？」

「ああ、それもっておきじゃぞ。あれは今からおよそ800年ほど昔・・・当時このエリアス一帯を『冬の魔王』と呼ばれる恐ろしい魔物が支配していたのじゃ」

「ビントーの伝説か。一説によると、そいつも『アガシュラ』だって一部の研究者は考えてるみたいだな」

「！？ アガシュラ・・・」

「まあ真偽のほどはわからぬがの。何しろずっと昔の事じゃし・・・っと、話すを戻すぞい。そのビントーを倒すために一人の魔導師と水の魔力を宿す巫人達が立ち上がったのじゃ。そして、長い死闘の末、ついに彼らはビントーを迷宮の奥に封じ込める事に成功したのじゃ」

「・・・そのどこが自分の昔話なんだ爺さん？」

「ええい、いちいち茶々を入れるでないわ。このあとが本題じゃ！

・・・その魔導師はビントーを封印するために、2つの一族に封印の力を授けたのじゃ。『雪女』と『氷雪の民』と呼ばれる者たちにな」

「・・・氷雪の・・・民！？」

ハヌイ老人の言葉に出た氷雪の民という単語に、イリスの脳裏に再び祖母の記憶がよみがえった。

あれはたしか物心がついたころ、その当時のイリスは祖母の語る外の世界での冒険譚に胸をときめかせていたのであった。

【ねえ、おばーちゃん。おばーちゃんと一緒に旅をしていたその人はどんな人だったの？】

【そうねえ・・・彼は『氷雪の民』と呼ばれる人たちの一人だね、雪の降る雪原で暮らしている人だったの。だからエルパやベスに行った時は、あまりの暑さに本当に苦しそうだったわ。

けどすごい我慢強くてね、苦しくても決して弱音を吐かなかった強い人だったの】

【ひょー・・・ゆき？】

【あら、そういえばここには雪が降らないから分からないわよね・・・そうねえ、イリスが大きくなったら一緒に雪原へ行って彼を訪ねてみましょうか】

【うん！ 約束だよおばーちゃん！】

「・・・リス。イリス！」

突如自分を呼ぶムーウエンの声が聞こえ、イリスはハッと我に変える。周囲を見渡せば心配そうなムーウエン達の表情が目映る。

「イリス・・・大丈夫？」

「やはり具合が悪いのかのう・・・なんだったらすぐに休むかい？」

「い、いえ！ 全然大丈夫です。ただ、小さい頃お婆ちゃんも氷雪の民って人と一緒に冒険した事があったなあって思いだしてただけで・・・」

「ほお～それは凄い！ ワシがまだ若かったころにも一人変わり者の氷雪の民が遊びに来た事もあったが、色々ともめ事があってのお・・・人間の前には滅多に顔を出さぬのじゃよ。

ましてや共に冒険となると・・・さすがは『デル族』としか言いようがないのう」

「・・・もめ事？ それって一体・・・」

カズノは首を横に振りながら、何かに絶望したかのようにため息をついてイリスの疑問に答えた。

「・・・まあ亜人の一族ってのもあるが、『氷雪の民』は魔力が衰えない限り若い姿のままなのさ。そして美男美女のそれはとても美しい姿をしているそうだ。

いつまでも若いままの姿を見て気味悪がられたり、その美貌を手に入れようと生き血を奪われたり・・・拳句、一時期はビントーを操ってエリアス一帯を滅ぼそうとしたなんていうデマが広がって迫害され続けてきたのさ」

「・・・なんか、ひどい話だなあ」

「ワシが言うのもなんじゃが、人間とは身勝手にわがままな生き物じゃからのう。そんなワシらに嫌気がさすのも無理はないわい。

が、ラジャータ様と先代国王様の働きで少しずつ交友関係が取り戻されかけ、昔はエリアスにもちらほらいたのじゃよ・・・ところが、北群の馬鹿が突然、雪原を自国の領土と主張して『氷雪の民』達にわしらの何倍も高い税金を払えなぞと一方的に言いよったせいでその関係を白紙にしてくれたわい」

「・・・今にして思えば、それもアガシュラの仕業だったかもしれないな。エリアスという大国にこれ以上力をつけられまいと北群をうまく利用していた・・・」

「・・・はっ！ いかんいかん、また重い空気になってしまったわい。話すを戻すぞい！

ワシが若いころには変わり者の『氷雪の民』がちょくちょく遊びに来てのう、一緒に釣りをしたり、ウインピークを狩ったり、たまにいろいろと悪さもしたりしたのう。あのころは若かったわい・・・ははは」

「へえー。でもどうしてその『氷雪の民』の人はどうしてハヌイおじいさんと仲良くなったの？」

「その頃のワシは家業の宿屋を継ぐのに反発しておっての、炭鉱の鉱石を掘り当てて一攫千金を狙ったのじゃよ。

じゃが、うっかり奥地へ迷い込んで恐ろしいモンスターに囲まれてのう。まさに絶体絶命のピンチに陥ったその時じゃ、たまたま同じように炭鉱来ていたその『氷雪の民』に助けられたのじゃよ。

あ奴も一族の宿命とか掟と言う奴にうんざりして、金を貯めて外の世界を旅してみたいと言っておったわい。まあ、あ奴はその後本当に旅に出たのじゃがな」

「フッ・・・なかなか骨のある奴だったんだなそいつ。掟に縛られないってところを見ると、さぞいい男だっただろうな。それで、そいつはその後どうしたんだい爺さん？」

「ううむ、それなんじゃがな・・・ある時急にふらっと戻って来たのじゃがな、なぜか旅の話をいつもはぐらかしてのう・・・まあ話したくない事を無理に聞くつもりもなかったから結局どういう旅に出たのかは分からずじまいじゃ。

じゃが旅から戻ったあ奴はまるで人が変わったかのように、エリアスと『氷雪の民』の共存のために色々と尽力してくれたのじゃよ」

「凄い人だったんですねその人。それで、今はどうしてるんですか？」

イリスがそう尋ねると、今度はハヌイが落ち込んだかのように顔を落として首を横に振りながら言葉をつづけた。

「その後も交易をしながらワシのもとを訪ねてくれてはいたのじゃが・・・5年前の北群の一方的な政策のせいでさすがのあ奴も怒り心頭じゃったの。その日以来さっぱり来なくなってしまったわい。

まあ、最後に会ったあの時から少しずつ老けて行ってたからの・・・来たくても年のせいで来れないのかもしれないが・・・まあワシも年じゃから似たようなものかのう。

それでも・・・死ぬ前にもう一度くらい、酒を酌み交わしてみたいものじゃのう・・・」

天井を見上げながら、ハヌイは懐かしむように深いため息をついた。その様子を見たイリスは、何かを思いついたかのような笑顔を見せて手を合わせる。

「そうだ！ ハヌイおじいさんが久々に会いたってという手紙を書いて、それを私たちが届けて言うのはどう？ 私も『氷雪の民』の人たちとお友達になりたいし、これぞまさに一石二兎じゃない！」

「・・・イリス、それを言うなら一石二鳥だよ」

「あれ？ そうだったかしら？」

「いやいや・・・確かにこの時期なら山の天候も安定しているが、それでも吹雪が起こる事もあって危険じゃ！」

それに、うっかり『雪女』達のテリトリーに入ってしまったら、問答無用で氷漬けにされてしまう。あ奴らは『氷雪の民』と違って人間に容赦がないんじゃ、そんな危ないところへ行かせるわけにはいかん！」

イリスの申し出た突然の提案に、ハヌイは一瞬驚いた風な表情を見せたが、それだけはダメだと言わんばかりに短く首と手を振ってイリスを制止する。

が、ハヌイの心配などどこ吹く風と言った感じで、イリスは瞳をキラキラさせながら鼻息を荒くする。

「大丈夫！ 私たちの強さはハヌイおじいさんも知ってるでしょ？ だからお願いハヌイおじいさん！ 私、どうしてもその人にハヌイおじいさんの手紙を届けたいの！」

あと、雪ってどんなのか見てみたいし、カッコイイ『氷雪の民』の人たちも見たいし、お友達になりたいし・・・」

「フッ・・・本音が出まくってるな。俺も全快なら『氷雪の民』の美女たちとお知り合いになりたいところだが・・・この様じゃ動く事も出来ないな」

「う～ん・・・僕も行きたいのは山々だけど、寒いのは嫌いだし、何より僕の回復魔法で早くカズノさんを治療しないとだし・・・」

「・・・ううむ、カズノ達がおれば頼んでいたかもしれないが、やはりお主一人だけで行かせる

わけにはのう……遭難してしまっははいくらお主でも危険じゃからな。気持ちだけ受け取っておくよ」

「そ、そんなあ……！」

カズノは負傷で仕方ないとして、まさか頼みの綱のムーウェンにまで拒否されてしまうとは……イリスはがっくりと肩を下ろし、しょんぼりした顔でため息をついた。

だが、カズノは落胆するイリスを励ます様に、言葉を続ける。

「おっと、まだ結論は早いぜ爺さん。遭難については大丈夫だ、俺のとおきのおきの秘密兵器ですぐにエリアスに戻れる。だから安心してイリスを行かせてやってはくれないか？」

「じゃ、じゃがのう……」

「フッ……爺さん、あんただって本当はもう一度そいつに会いたいんだろ？ 良い機会じゃないか、あんたの会いたいって思いの丈を手紙で書いちまえばいいさ」

「……」

ハヌイはしばし目を伏せて、大きく深呼吸すると決心したように頷いた。

「まったく……お主らには負けたわい、今晚中には手紙を書いておくよ。それから、防寒着も用意しておくかのう」

「それじゃあ……！」

「ああ。手紙はお主に任せるよイリス。ただし、無理だと思ったらすぐに戻ってくる事。それから、決して無茶はしない事……約束じゃぞ？」

「分かってます。ハヌイおじいさん！」

「……さて、そろそろ仕事に戻るとしようかの。それじゃあの」

ハヌイは重い腰をあげると、自室へと戻っていった。イリスは興奮を抑えきれないのか、ベットの上で子供の様に飛び跳ねて無邪気にはしゃいでいる。

その様子を見てムーウェンとカズノはやれやれと言った感じで肩をすくめていた。

——翌日。

出発の準備をするイリスを呼びとめ、カズノが小さなカプセルをイリスに手渡していた。

「これが昨日言っていた……秘密兵器？」

「フッ……ああそうさ。なんでも古代都市アトランティスが存在していた時代に作られたもので、『ワープカプセル』って言う奴だ。

これを使えば、表面に描かれた特定の都市へ瞬時にワープできるっていう代物だ。見てみな、エリアスの王宮が映っているだろ？」

「本当だあ……それにしても瞬間移動だなんて、アトランティスの文明って不思議だなあ……」

「あっ、そういえばインヴォーグを倒した後すぐにカズノが消えたのって……それのおかげだったんだ！」

「フッ……その通りさムーウェン」

「むう～、そんな便利なものがあるなら僕たちも一緒に運んでくれればよかったのに！」

「無理を言うなよ……これは太古の昔に造られた貴重品だ、闇市でもそうそう手に入る代物じゃないんだ。

そして、それが最後の1つさ。それを使えば一瞬でエリアスに戻れる、だからくれぐれも失くすなよイリス？」

「分かったわカズノ……さん。大事に使わせてもらうね」

「フッ……さんは付けなくていいっていつも言ってるだろ？」

「あっ……えへへ、でもなんだか慣れなくて」

カズノがやれやれと言った感じで肩をすくめたその時、防寒着と手紙を携えてハヌイが入って来た。

「おまちどうさま。雪原へ行くものは稀じゃから、こんなのしか用意できなくてのう……ちょっと着てみてくれないか？」

「はいっ。えっと……うんと……こ、こんな感じかな？」

ハヌイの用意した防寒着を纏って、背丈に会っているか確かめるようにイリスはきょろきょろと見回す。その姿を見てムーウェンは思わず声をあげる。

「うわあ、なんかイリス可愛い～！」

「え？ そ、そう？」

「ふむ。どうやら背丈に合った様じゃの、よく似合ってるぞい」

「フッ……毛皮のコートが大人びた雰囲気醸し出しているな。はじめて会ったら迷わずナンパしていただろうぜ」

「もうっ、カズノさんってば……からかわないでください！」

「フッ……これが俺流の褒め言葉だぜ？」

「ははは。さてもうひとつ……もしワシの友人に会う事があったら、この手紙をどうか渡しておくれ。名前は手紙に記してあるでな、そいつは自分の名前をよくからかわれておったからのう……」

イリスはハヌイから手渡された手紙の宛名を見て、思わず吹いてしまう。その様子を見てハヌイは苦笑いを浮かべるが、イリスは軽く咳をするとポーチの中に手紙を大事にしまう。



「これでよしと・・・それじゃあハヌイおじいさん、ムーウェン、カズノさん、行ってきますっ！」

「気をつけてな」

「フッ・・・はしゃいで滑って転ぶなよ」

「イリス・・・遭難しないでよ？」

「～～～。大丈夫だって、この防寒着もあるし、カズノさんの秘密兵器もあるし・・・・・・・・絶  
対遭難しませんよーだっ！

それじゃあ、今度こそ行ってきますっ！」

イリスは宿屋を後にすると、これから初めて見る雪や『氷雪の民』達に期待を膨らませながら雪原へと続くメルヘン橋へと向かっていった――。

## 雪原にて

---

エリアスと雪原をつなぐ唯一の橋、メルヘン橋を通り抜けるころには、空から白い雪がちらほら降り始めていた。彼女に吸い寄せられるかのように、一片の雪がイリスの頬に触れる。

「うわあ、これが雪かぁー・・・白くて、冷たくて何だかわくわくしちゃう！」

イリスははじめて見る雪に興奮しながら、橋を渡り、雪原へと足を踏み入れた。

「うっ・・・・・・・・わあ～～～っ！！　すごーい、辺り一面真っ白！　きれーい・・・・・・・・」

イリスの目の前に一面雪で覆われた銀世界が姿を現した。長い銀髪をなびかせながら、イリスは初めての銀世界に心を躍らせる。

祖母やハヌイ爺さんの話で想像していた以上に、美しいその姿を見て、イリスは感慨深げに深いため息をついた。そして次の瞬間には、イリスは斜面を滑り降りて白い新雪の中に身を埋めていた。

「・・・・・・・・ぷはっ！　あはは、冷たくて気持ちいい～～・・・・・・・・」

柔らかな雪の中に飛び込み、まるで幼子のように無邪気に転げ回るイリス。やがて起き上がると、雪を集めて雪玉を作り始めた。

「うわあ、こんな風にもなるんだ・・・！　そうだ、良い事思いついちゃった！　プリリンちゃん、プリリンちゃ～ん。真っ白でかわいいプリリンちゃ～～ん・・・・・・・・」

イリスはいたずらっ子の様な笑みを浮かべると、雪玉をこねて何かを形作っていった・・・やがて完成したそこには、見るも無残な非常に残念な姿のプリリン(?)らしき物体が出来上がっていた。

イリスは首を一回ひねった後、自分の不器用さに落胆して肩を落とす。

「はぁ・・・おかしいなあ、私の想像なら真っ白なかわいいプリリンになったはずなのに・・・・・・・・」

イリスはその残念なプリリンを崩して雪に戻すとすっと立ち上がり、雪原の中を雪をかき分けて進んでいった。

その道中で樹木を蹴って、葉に覆いかぶさった雪を崩してみたり、雪玉を転がして大きくしたり、斜面から滑ってははしゃいだり、雪原を満喫していたイリスだったが・・・・・・・・この数分後に、彼女は雪原の冷酷な洗礼を受ける事になるうとは思ってもいなかった。

「うう～っ、寒い！寒いよお・・・」

突如として巻き起こった吹雪に、イリスは体を震わせながら雪原を歩いていた。先ほどまでの雪遊びが祟ったのか、防寒着に溶けた雪がしみ込んで防寒機能は著しく低下していた。

イリスはそれでもなお『氷雪の民』を探そうと歩き回っていたのだが・・・不意に、彼女のお腹からぐう～っ！と腹の虫が啼いて、空腹を訴える。

「お腹空いたなあ・・・それに寒い・・・こ、こんなことなら来る前に沢山ご飯食べてくるんだった・・・・・・・・」

イリスは崖と崖の間のわずかな隙間で身を縮こませ、身体を震わせながらそう呟いた。ふと、イリスは思い出したかのように、ポケットの中からカズノの秘密兵器を取り出した。

だが、その秘密兵器を見つめながらイリスは悩む様に目を細め、口をへの字にする。

「むう～～・・・ちょっと迷っちゃったし、お腹空いたし帰っちゃおうかな・・・・・・・・いやいや、まだ弱気になるのは早いわイリス！ 私ならまだいける、まだやれる！

・・・もうすこし迷って本当にお腹が減ったらこれを使っちゃおう・・・・・・・・」

イリスがそう決意した瞬間、一層強い吹雪がイリスを襲った。

「きゃあっ！ ひどい風だなあもう・・・・・・・・？」

・・あっ！！ 秘密兵器がないっ！！」

イリスが我に変えれば、彼女の手元にあったはずの秘密兵器が姿を消している。おろおろしながらイリスが辺りを見渡すと、彼女の少し目の前に秘密兵器のカプセルが転がっていた。

「よかったあ・・・失くしちゃったかと思っちゃった・・・・・・・・」

イリスがカプセルに手を伸ばそうとした瞬間、再び吹雪が巻き起こり、カプセルはあらぬ方向へ転がっていく。

「え？ ちょっ・・・ま、待ってよおっ！！」

転がるカプセルを追いかけて、イリスも後を追う。タイミングを見計らって、イリスが飛び込むようにカプセルに手を伸ばすが、それをあざ笑うかのように、カプセルはころころと転がり、イリスを雪の中に埋める。

先ほど違い、不機嫌そうな表情を浮かべて雪の中から起き上がり、何度も何度もカプセルを捕まえようと懸命に走るイリスだったが、そのたびに何度も何度も雪に埋まってしまう。

「むう～～～っ・・・・・・・・いい加減ししろーっ！」

イリスが怒声をあげながらカプセルに飛びつくが、再びあらぬ方向へ転がり、イリスから逃げていく。イリスは先ほどからの行為でかなり消耗したのか、荒く息を吐いていた。

「はぁー・・・・・・・・はぁー・・・・・・・・っ！？ え？ 嘘っ！？」

いつの間にかカプセルは崖の傍へと転がり、今まさに落ちようとしていた。慌ててイリスが走り出す。

「だ、ダメっ！ あれがないとエリアスに帰れなく・・・・・・・・待つてえ！」

イリスが崖に走り寄り、カプセルを掴もうとした瞬間、再び吹雪が吹き荒れる！ イリスが思わず身を影めてしまったその瞬間だった・・・

「あっ！！！」

イリスに追い詰められたカプセルは、まるで崖から飛び降りて自殺を図るサスペンス物の犯人の様に、彼女に決して捕まらまいと、ゆっくりと、崖から消えるように転がり落ちて行った・・・イリスが慌てて崖の下を見て見るが、カプセルは崖の遥か奥底・・・崖の切れ目の真っ暗な闇の中へと消えていった・・・・・・・・

唯一の希望を失くし、落胆したイリスはそれでも立ち上がろうと身体に力を込めるのだったが・・・・・・・・

**グギョルルル～～～ッ！！**

「・・・・・・・・あうう、もう駄目っ」

ひとしきり大きな腹の虫を啼かせると、イリスは雪原にバタリと倒れ、雪に体を埋めていった・・・・・・・・。雪に埋もれながら、イリスは後悔する様に心の中で呟き続ける。

（こ、こんな所で倒れるわけにはいかないのに・・・私にはお婆ちゃんの仇討ちがまだ・・・・・・・・ああ、こんなことなら早くあれを使ってエリアスに帰るんだったわ・・・。

ムーウエンの心配したとおりに遭難しちゃって・・・このままだれにも見つからずに死んじゃ

うのかなあ・・・・・・・・？

せめて・・・・・・・・ハヌイおじいさんの・・・・・・・・・・てが・・  
・み・・・・・・・・を・・・・・・・・め・・識・・・・・・・・  
・が・・・・・・・・)  
「きゅう、きゅう」

死を覚悟したイリスの耳元で、不意に謎の音が聞こえる。その音に気がついて、イリスはうっすらを目を開けた。すると・・・・・・・・。

「きゅう？」

イリスの目の前に、ピンク色のふわふわな毛並みをした、まるで綿あめの様な生き物がいつの間にか現れ、不思議そうに見つめていた。最初は訝しげに眺めていたイリスだったが、徐々に意識が覚醒する。

「きゅ～きゅう、きゅう」  
(変な綿あめ・・・変な声で鳴いてるし、動いてる・・・あれ？ それってつまり・・・つまり・・・・・・・・っ！！)

食料を見つけたことで一気にイリスの意識が覚醒する。イリスはスッと起き上がるとその生き物を見つめじゅるりと涎を垂らしていた。

彼女の変貌ぶりに、生き物はビクッと体を震わせた。

「きゅっ！？」

「飯・・・ごはん・・・いただきますっ！」

イリスは弓を取り出し、生き物に狙いを定め弓を引き絞る。生き物はふるふると身体を震わせて懇願するように涙を流した。

「きゅっ？ きゅうきゅうっ！」  
「ふふふ、大丈夫だよご飯ちゃん・・・ちゃあんとちゃあんと、残さず食べてあげるからね！」  
「きゅ、きゅきゅ～！！」

イリスが今まさに矢を放とうとした、その瞬間だった。

「ごるうあああああああああああああっ！」

ヒトン家の家畜に何してやがんだ手前はあああああああああ！

」

「!？」

どこからともなく聞こえてきた少女の叫び声に、イリスは気を取られ狙いを外してしまった。難を逃れたあの生物は少女の声が聞こえたほうへと逃げて行った。

「えっ、誰！？ どこ・・・？」

暫く周りをきょろきょろと見渡すイリスの目の前に、崖の上から声の主と思われる一人の少女が現れ、イリスを睨みつけた。

声の主は、頭に青いアザラシの様な毛皮を被り、水着の様な服をまとい、飾りのない簡素ながらも丈夫そうな槍を持った金髪の少女だった。良く見ればその手には黒くて鋭い爪が生え、びっしりと白い毛で覆われていた。足も同様に白い毛で覆われ、鋭い爪が3本生え揃っていた。明らかに人間ではない・・・亜人。その姿をまじまじと見つめていたイリスに、少女はムスっとした表情で先ほどの生き物を小脇に抱えたまま、槍を構えてイリスを威嚇する。

「あ、あなたは・・・？」

「お前、見たことない奴だな。どうせバカな奴に雇われて、家畜を狙ってるアホな冒険者だろ！？」

「アタシ達はちゃんとエリアスの法律に則って商売しているのに・・・どこまでも自分勝手な奴らめ！」

「えっ？ それじゃあなた・・・もしかして『氷雪の民』の人？」

イリスの放った『氷雪の民』という言葉を受けて、少女は侮辱された様にぎりぎり歯ぎしりを鳴らす。

「・・・そうだよ。なんか文句でもあんのか？」

「うわーっ！ 本物だあ！」

「・・・へ？」

少女の啖呵には目もくれず、イリスは目をきらきらと輝かせて、興味津々と言った感じだ。対して、突然奇声を発したイリスを見て少女は驚いた顔つきで間の抜けた声しか出なかったが、すぐにキッと鋭い目でイリスを睨んだ。

「あ、びっくりしちゃった？ ごめんなさい。でも私ね、お婆ちゃんやハヌイおじいさんに『氷雪の民』のお話をしてもらって、会ってお友達になりたいなーってずっと思ってたの！！」

「・・・へえ、友達に・・・ねえ」

うきうきと少女に話しかけるイリスに対し、少女は侮蔑するように笑みを浮かべていた。

「アタシ達をつい最近まで『バケモノ』って罵ってたエリアスの連中にも、おめでたい奴が居たもんだな」

「え？ 私、生まれも育ちもベロスよ？」

「フン！ どっちだって構いやしないさ。それよりも、お友達になりたいんなら、アタシ達の飼ってるケモノプリリンを狩らないで欲しいな・・・すごい迷惑だからさ」

「えっ！？ あの綿あめみたいなのもプリリンなの？」

ケモノプリリンの事も知らないとは・・・少女は呆れた様に頭をかきながら話を続ける。

「まったく、本っ当に田舎者だなお前・・・こいつらの毛皮や瞳はいい値段で取引されるんだ。アタシ達にとっちゃあ重要な収入源だよ。

それなのに、お前達人間はさも自分たちの物の様に勝手に狩りやがって・・・こっちはいい迷惑なんだよ！」

少女が声を張り上げてそう叫ぶと、急にイリスの瞳から涙がつうーっと一筋流れた。それをみて少女は動揺する。

「えっ・・・なっ、何泣いてんだよ！？」

「・・・ごめんさない」

「・・・え？」

「そうよね・・・大事に大事に育てた家畜を勝手に殺しちゃうのは酷い事よね。

私、知らなかったとはいえなんて酷い事を・・・本当に、本当にごめんなさいっ！」

突然、イリスはしゅんとしてしまい、涙をにじませながら力なく少女に謝った。少女は、イリスの落胆振りになぜか心がズキッと痛んだ。

そして、今にも泣きそうなイリスを見るや否や、さっきまでの敵意は何処へやら、慌てふためきながらイリスを慰めていた。

「だ、だからなんでお前が泣くんだよ。本っ当変な奴だな・・・私も言いすぎたよ、悪かった！だから、泣くなよ・・・な？」

「ご、ごめんなさい・・・私、急に・・・あなたって良いヒトね」

「へ？ えっ？ ばっ・・・バカな事言うんじゃないよ！ アタシはお前を脅したんだぞ？ わ、悪い奴なんだぞ？」

「ううん、いいの。そもそも私が勝手にその子を狩ろうとしたのが悪いんだし……」  
「あ、そういえば……どうしてこいつを狩ろうとしたんだよ？ 理由があるんなら話してみな？」  
「……そ、それはその……」

グギョルルル〜〜〜ッ！！

「……〜〜っ！」

思い出したかのように、イリスの腹の虫が催促する。突然の事でイリスは赤面し、少女は納得したように頷いた。

「ああ……そう言う事。まったく……仕方がないな、エリアスまで送ってってやるよ」  
「え？ 本当！？ ありがとう！」  
「……べ、別にお礼を言われるほどじゃあないさ。さっ、早く行こう……」

イリスをエリアスに送ろうと、少女がイリスに手を差し出そうとした瞬間だった！ 突然大きな吹雪が巻き起こり、二人の視界を遮った。

「きゅう〜〜っ！！」

「きゃああっ！」

「なっ、なんだこりゃ……こんな荒れ方、今まで見た事ない……」

突然の荒れ方を不思議に思う少女の背後から、ゆっくりと獲物を狙う様に……巨大な氷の腕が現れて、少女に狙いを定めると、石弓にはじかれたかのように一気に加速して少女を掴んだ！

「え？ ぐわあっ！」

「ひゃっ！ な、何なの！？」

槍とケモノプリリンをその場に置き去りにして、少女は腕に掴まれて空高くへと登っていく。ここなら邪魔されないと判断したのか、少女を掴んだ腕はそのまま少女をぎりぎり締めあげ始める。たまらず少女は悲鳴を上げた。

「うあああああああっ！ かっ……はあ……っ！！」

「このままじゃあの子が……！ こうなったら」

少女を助けるためイリスは弓を取り出し、氷の腕に狙いを定め弓を引き絞る。矢の先端から神



秘的な光があふれ、一際大きく輝いたのを見計らってイリスは矢を放つ。

「いっけええええ！」

イリスの放った矢は虹色の閃光を纏い、氷の腕をいとも簡単に貫いた！

『又ウァアァアアッ！？』

矢を打ち込まれた氷の腕は激しい悲鳴を上げて少女を手放すと、そのまま碎けて消えてしまった。それと同じくして、先ほどまでの吹雪がまるで嘘の様に収まり、空が晴れ渡る。

敵の気配が消えたのを察して、イリスは弓を納めて少女へ駆け寄り手を差し出す。

「ケホッ・・・ゲホゲホッ・・・今の一体・・・？」

「・・・もう大丈夫。この周辺にはもういないわ、けがはない？」

「お、おう。えっと・・・」

イリスの差し出した手を前にして、急にもじもじし始めた少女。その事を不思議に思いイリスが首を傾げると、恥ずかしそうに少女が尋ねる。

「お前の名前・・・なんだよ」

「え？」

「お、お前の名前が分からないと、お礼が言えないだろ！」

顔を赤らめながらそう叫んだ少女の言葉を聞いて、イリスは思い出したように声をあげていた。

「あっ、そういえば自己紹介がまだだったわ！ 私はイリス。イリス・イヴィエール！ よろしくね、えっと・・・」

「・・・あ、アタシはセルキー。ありがとうな、イリス・・・」

「セルキー・・・良い名前だねっ」

「へへっ、お前もなっ！」

——互いの名を明かした少女たちは固く握手をすると、お互いに笑顔を見せる。こうして、デル族の少女イリスと、氷雪の民の少女、セルキー・・・二人の少女の出会いと別れの物語は始まった。

## トクの陰謀 — 蘇る冬の魔王 —

——イリスとセルキーが友情を深めていた時を同じくして、ここは『雪女』が集う氷の城。『冰雪の民』より冷酷で、出会った人間に対し、一切の容赦もなく凍死させる女傑たちの難攻不落の城塞。

だが、今ここに一人のアガシュラが現れ、最強を誇っていた雪女たちを次々と葬り去っていった。そのアガシュラは頭に長いリーゼントを生やし、白衣を纏った……一見して科学者、あるいは研究者の様な風貌の男だった。

寝不足なのか目の下に隈を作りながらも、その瞳は他人を見下すような嫌な目つきで、その奥にとめどない狂気と殺意を宿らせていた。

悪魔を思わせる黒い三叉槍からは稲妻を走らせ……自らに迫りくる雪女をその槍で貫いて、まるで雪だるまを壊すかのようにいとも簡単に砕いた。ボロボロと崩れ落ちて雪の塊となったその雪女を見て、アガシュラは不気味な笑みを浮かべる

「キヒ！ おいおい……『冬の魔王』を封印する2大種族の片割れなんだろう？ もうちょっと手ごたえがあると思ったのにつまんねえなあ……？」

「おのれ……ゴミの分際で生意気な奴め……」

「はぁ……？ お宅らひょっとして俺が人間だと思ったのかいい……？ キヒ、キヒヒヒヒ！！」

「気持ち悪い笑みを浮かべおって……何が可笑しい！」

「いやぁ、済まねえ済まねえ。そういや自己紹介がまだだったなあ……俺は【狂気のアガシュラ】トク……親しみを込めてトク様と呼びやがれクソアマ共」

トクの口から出たアガシュラと言う単語に反応し、雪女たちは戸惑い、動揺する。

「アガシュラですって……？」

「そんな馬鹿な……」

「だけどあの異常な強さはそうでなきゃ説明できない……」

「私たちが勝てるかどうか……」

周りの雪女たちが戸惑いながらささやく中、雪女の長が皆を奮起させるように声を荒げる。

「皆、何をうろたえておる！ 例えアガシュラであろうが、そうでなかろうが、我らのやることは一つ……『冬の魔王』の話に惹かれ、この雪原に近づくものを皆、殺すまでよ……あれをこの世に甦らせるわけにはいかぬ！

それがこの世の安寧を望んだあのお方と固く誓った我らの契り……我らが誇り！ 貴様がアガシュラであるならなおの事……刺し違えようと、貴様はこの場で葬ってくれる！」

「キヒ！ 例え何者であろうが皆殺し……か、一見すると一方的で横暴な酷い奴の様だが、正しい良い答えだ。危険に近づく子供を殴ってでも止める親の様じゃないか、嫌いじゃないねえ……『冬の魔王』はそれだけ危険だという事だろ？」

「余裕を見せてられるのも今のうちだ……今すぐ息の根をとめてくれる！ 『アイススピアー』！」

トクの周囲に冷気が集まり、一瞬にして氷の柱と化してトクを柱の中に封じ込めた。あまりの一瞬の出来事に、トクは反応できなかったのか、不思議そうな顔つきのまま氷の中に封じ込められていた。

アガシュラと言えどあつけない……雪女の長は鼻で笑いながら氷の柱を砕いた。

「ハッ！ 如何に不死と言われるアガシュラと言えど……呆気ないものだったわ」

「おいおい、まだ俺を勝手に殺すなよお」

「!？」

雪女の長が振り返れば、そこには傷一つない姿でトクが気味の悪い笑みを浮かべていた。先ほど砕いた氷の柱を見れば、先ほどまでトクだと思っていたそこに、恐怖にひきつった表情の雪女の姿があった。

仲間を自らの手にかけてさせた怒りで歯ぎしりを鳴らしながら、長はトクに冷気を浴びせる。

「おのれえ・・・よくも仲間を！」

「おいおい、俺が騙したとは言え殺したのはアンタだろお？」

「黙れえ!!!」

トクは雪女の攻撃をひよとかわすと、槍に稲妻を纏わせて地面に向かって構える。

「キヒ！ そんなに自分の手で仲間を殺したのが嫌かぁ・・・そうかぁ、それじゃあ俺が代わりに殺してやるよお」

「その構えはまさか・・・！ 皆、早くこの場から・・・」

雪女の長がその構えに気付いて、仲間には逃げる様に促すが、それよりも早くトクの槍が地面に突き刺さる。

「百・花・繚・乱！」

トクの槍が地面に突き刺さった直後、槍の周囲の地面が歪み、不気味な黒い空間が地面を覆い尽くす・・・その黒い空間から、トクの槍が無数に分裂し、長を残した他の雪女たちを次々に串刺しにする！

トクが地面から槍を引き抜くと、黒い空間も消え、後には雪女たちの残骸である雪の塊だけが残っていた・・・

「あ、ああ・・・そんな・・・みんな・・・」

「キヒヒヒ！ 名前のごとく百の花の様に皆綺麗に散ったなあ・・・いやあ、実に綺麗だった。キヒヒヒヒ！」

「この・・・外道めえええええ!!!」

一人残された雪女の長は、他の雪女達の残骸から魔力を集め、樹氷の様な姿の氷の弓を作りだすとトクに目がけて矢を放った！

その弓を見て、トクは気味の悪い笑みを浮かべて槍を長目がけて放り投げた・・・一瞬の間を空けて、何かを貫く音だけが響いた。

――厳冬のラビリンス入口。雪女たちを全滅させたトクは、戦利品の氷の弓を携えて、迷宮の外から中に向かって『ピントー』に声をかける。

「よお、ピントーさんよお。調子はどうだい？ キヒヒヒヒ！」

『又ウァア・・・その声はトクちゃんか。又ウァハハハハ！ 俺っちならいつも通り・・・と言いたいところだがあ・・・』

「？ どしたよピントーさんよお？」

『ぬうあぁに・・・漸く左腕が外に出られたからよお、俺っちのコレクションを集めようとしたんだがなあ・・・砕かれちゃったんだよ又ウァハハハハハハハ！』

「はぁー？ あんたならすぐに再生できんだろ？」

『又ウァッフフ・・・それがどういうわけか全く再生しないんだわ。又ウァハハハハ、俺っち大ピーンチ！』

それがどういう意味かを理解するのに、トクはしばしの時間を必要とした。背後で吹雪の音だけが空しく響く中、ピントーの言葉の意味を理解したその瞬間

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあああああつ！??」

トクは普段なら絶対に出す事のないほどの大音響でそう叫んでいた。そのリアクションが面白かったのか、迷宮の奥からピントーの笑い声が聞こえてきた。

『又ウァハハハハハ！ なかなか良い～いボーイスじゃないかトクちゃん』

「おいおい・・・封印が緩んだからって、はしゃいで左腕失くすとは冬の魔王が聞いて呆れるぜえ」

男に反省するかのように、迷宮の中から声が響く。

『すまねえなトクちゃん・・・何しろ800年も閉じ込められてたら退屈だよお』

「はぁ・・・気持ちはわかるが、もう少し我慢してくれよ。ほら、これでも食って封印解いちまいな」

トクと呼ばれた男が氷の弓を迷宮に放り込むと、迷宮の中から歓喜の叫び声が響いた。やがて、迷宮の外へ巨大な炎の様な意匠の氷山の化け物が姿を現し、大爆笑する。

『又ウァハハハ！ ピントー様復かあああつ！ ん～やっぱ娑婆の空気は良い～いねえ・・・』

「キヒ！ さすがあ、雪女全員分の魔力が込められた弓だ・・・全身が出るとは思わなかったぜえ・・・・・・・・」

『サンキュウトクちゃん。雪女共を滅ぼしてくれたお礼はたっぷりとするぜえ。と、言いたいところだが・・・もう半分の封印解かなきゃ俺っちそう遠くには動けないのよ。つーわけで、これから冰雪の民全滅させに行くわけだが・・・・・・・・』

「キヒ！ その後から好きに暴れてくれりゃあ十分だ。んじゃあな、俺様はもう一仕事あるんでね・・・龍京の神様をアガシュラの仲間入りさせるって言う大事な仕事がああ・・・・・・・・キヒヒ！」

『ハッハ。最近のアガシュラは多忙だなあ、応援するZE☆』

「キヒ！ ありがとうよお・・・ああそうだ。一つ言い忘れてた」

『？ ぬうあぁんだ？ 俺っちを外に出した報酬でもほしいのかぁ～？』

「違う違う。そうじゃない・・・ここいらにデル族の最後の生き残りがうろついているらしい。エリアス王宮に潜り込ませてた捨て駒がやられちゃったからなあ・・・」

『ぬうあぁあんだとおううっ！？ デル族だと！？ そいつあ、一大事だ。ってことはあれかい、俺っちの腕が再生しなかったのも・・・そいつの仕業だってかい！？』

「多分そうだろうよお・・・まあ、用心するに越したことはないぜえ・・・じゃあ、俺は行くわ」

そう言ってトクは赤いロボットを呼び出し、それに乗って龍京へと飛び去って行った。それを見送ったビントーは氷雪の民の集落を見据え、気味の悪い笑みを浮かべていた。

おいでませ、氷雪の民の集落へ！

---

——イリスに助けられたセルキーは、お礼も兼ねてイリスを自分たちの集落へと案内していた。途中、いくつもの断崖や入り組んだ狭い洞窟を進み、すでに日が落ちかけ夕方になろうとしていた……。

そのあまりにも過酷な道のりに、イリスは思わず弱音を吐く。

「うー……私もう疲れちゃった……」

「ハハッ！ なんだかんだでイリスは良く付いてきてる方だよ。もう少し時間がかかると思っていたけどそろそろ着くぜ」

「本当？ それならよかったあ……それにしてもこんなに入り組んだ道を進むなんて思ってもみなかったわ。これじゃあたどり着けないわけね……」

「ん～～……まあ、一応アタシらの集落は秘密ってことだからな、毎回帰り道は変えてるんだ。もうちょい楽な道もあるけど、誰かに尾けられてないかとか心配だよお……いや、疑ってるわけじゃないんだぜ？」

「ううん、気にしないで。あなた達が人間にひどい事されたのは知ってるから……それに比べたらこんなの何でもないよ！」

「……そっか。ん……？ あれは……」

ふと、セルキーは崖の割れ目にあるものが目に付いて、そちらへ一目散に駆けだしていく。特に何も無い場所へ走り出すセルキーに対して頭に疑問符を浮かべるイリスだったが、セルキーは大きく手を振ってイリスを呼んだ。

「おーい、イリス～～！ こっちに温泉湧いてるから、ちょっと休憩しようぜ～！」

「ええっ！？ お、温泉……！？」

温泉……その魅惑的な響きにイリスはセルキーのもとへ速足で駆け寄る。やがてイリスが温泉にたどり着くと、そこには足首がつかれる程しかない浅い水位の……温泉というよりは水溜りの様な場所で、セルキーが気持ちよさそうにバシャバシャと足で水を蹴っている。

彼女の連れてたケモノプリリンも、水溜りの様な温泉の中に飛び込んで、気持ちよさそうにきゅううと鳴いてプルプルと体を震わせていた。自分の想像していた温泉と違って、イリスはがっかりしたようにしょんぼりとしていたが、セルキーは自分のすぐ横の岩から雪を取り除くと、そこに座る様に手で促す。

「そうがっかりするなって、『足湯』って言ってこれも立派な温泉なんだからな。ほら、早く裸足になって浸かってみなって、気持ちいいぞお～！」

「う、うん……」

セルキーに促され、イリスも靴を脱いで素足をお湯の中にそっと入れた。次の瞬間、足の裏からポカポカと温かい温泉の熱が全身を駆け巡るような衝撃を受け、イリスはケモノプリリンと同じように身体をプルプルと震わせていた。

「〜〜〜っ！ はぁ・・・・・・・・気持ちいい〜！ 足だけなのにこんなに気持ちいいんだね・・・・・・・・」

「だろだろ？ このあたりはこうした岩の隙間に、こんな感じで温泉がちらほら湧いてるから、アタシらも疲れた時はこうやって疲れを取ってるんだ。

一応、ちゃんとした温泉もあるにはあるけど、そっちは『雪女』達のテリトリーだからいろいろと面倒なんだよなぁ・・・・・・・・」

「ハヌイおじいさんも『雪女』は怖いから近付いちゃだめって言ってたけど、そんなに怖いの？」

「まあな。アタシらと違って『冬の魔王』を封印する使命にこだわり過ぎてるって言うか、融通が聞かないっていうか・・・・・・・・『自分たちの持ち場を離れて湯に飛び込むとかどうかしてる』ってな感じでチクチク嫌みを言うんだよ・・・。

あいつらは雪から生まれたから、疲れしないし、温泉に入ったら溶けちゃうとかで全然入らないから宝の持ち腐れって感じでさ・・・・・・・・温泉に入れば肌もツヤツヤになるし、ぽかぽか暖かくて気持ちいいし、なにより温泉から見上げる星空や、景色は最っっ高に綺麗なのに！

後、温泉に入る時に一緒に卵も入れて、上がるころに食べるともうとろとろで美味しいし、何より、風呂上がりにエリアスで仕入れた牛乳を飲むと本当こう・・・・・・・・生き返るって気分になるんだ！

本当もったいないから、アタシら何度も交渉したんだけど全く聞く耳持たなくてさぁ・・・・・・・・（ブツブツ）」

ぶつぶつと文句を言い続けるセルキーを見て、思わず苦笑いを浮かべるイリス。

「あっはは・・・・・・・・それにしても、セルキーって温泉大好きなんだね。私、てっきり寒いところで暮らしてるから、熱いの苦手かと思っちゃってたわ」

「確かに夏の間の熱すぎる天気とかは苦手だけど、温泉は別かな？ アタシらは水の魔力持つてるから、寒さには平気なんだけど、あくまで平気なだけで、身体はガチガチに固まって困るんだよ。だから、体をほぐしてくれる温泉はアタシらにとって必要不可欠さ！

イリスの居たところじゃあ温泉に入る習慣はないのか？」

「ううん、私もお風呂大好きだよ。こんな感じで温泉が湧いてはないけどね・・・・・・・・この足湯ってのもいいけど、セルキーの話聞いてると、私もなんだかその温泉に入りたくなっちゃったなあ」

「今日はこのままアタシらの集落に行くけど、明日にでも行ってみるか？ まあ、雪女に見つからないようにしないといけないけど・・・・・・・・」

「うーん……実を言うとね、本当は今日中に『氷雪の民』の集落に行って帰るつもりだったんだ。ハヌイおじいさんとか皆が心配するだろうし……」

「ふーん……一人で冒険してるってわけじゃないのか。まあそこは人間には危険だし、それがいいかもな」

「ごめんね。せっかく誘ってくれたのに」

「良いて良いて。家にも風呂ならあるから、妹と一緒に入ろうぜ。なんだったら、サービスで腰とか胸とか揉んでやるからさあ……ニヒヒ！」

いやらしい手つきでニヤリと笑い、イリスをからかうセルキーに対して、イリスは顔をちょっと赤らめながら声を荒げる。

「ちょっ……ちょっと、セルキー！ 冗談はやめてよ！」

「ハハッ、悪りい悪りい」

「って言うか、妹居たんだ……」

「ん？ ああ。このケモノプリリンも妹のお気に入りの奴だよ、プリちゃんっていうんだ。イリスと会うちょっと前にケモノプリリンを放牧させて帰ったら、こいつが居ない事に気がついて妹が泣き出したんだ。

だからあの時は本当慌てて引き返して来た後だったんだよ……で、そこに今にもこいつを襲おうとするイリスを見つけちまってつい怒鳴っちまったんだ」

「ふーん、そうだったんだ……セルキーって本当優しいんだね」

「そ、そうかな？ 自分じゃあよく分からないけど……！？」

ふと、セルキーが空を見上げれば、イリスと話しこんでいる間に夕方になり、いつの間にか辺りがオレンジ色に包まれ始めていた。

それに気付いたセルキーは勢いよく起き上がると、声を荒げて慌て始める。

「いっけね、もうこんな時間じゃないか！ イリス！ 早く靴を履いて！ 急いで集落に行くよ！」

「え？ 急にどうしたの？」

「良いから早く！ 早くしないと……」

先ほどどうって変わってセルキーが慌てふためく……尋常じゃないその慌て様にイリスも促され、起き上がって靴を履く。同様にケモノプリリンのプリちゃんも温泉から上がって、身体を激しく降って水を飛ばし始めた。それを確認したセルキーはプリちゃんと掴むとわきに抱えた。

「きゅっ！？ きゅううううう！」

「よし、靴を履いたな？ それじゃあ急ぐぞ、付いて来な！」

「えっ、ちょっとセルキー！？」



急に慌て出し、いきなり走り出したセルキーを不思議に思いながらも、イリスは彼女をのあとを追う。先ほどの足湯のおかげで足の疲れが飛んでいたものの、急な傾斜を何度も走るセルキーを追いかけて、再びイリスの身体に疲労がたまり始める。

イリスの疲れが再びピークを迎え、へとへとになった所で漸くセルキーは足を止める。それを見てイリスは内心、ホッとしていた。

「はあ〜〜〜・・・・・・・・間に会った〜〜。見てみなよイリス、これがアタシ達の集落さ！」  
「ぜえ、ぜえ、はあ、はあ・・・・・・・・・・！！ うわあ、すごーい！」

急に走り出したセルキーを追ってへとへとだったイリスだったが・・・・・・・・彼女が顔をあげた次の瞬間には、セルキーの集落の美しさに目を奪われ、今までの疲れが嘘の様に吹き飛んでいた。

海岸に面した集落は鮮やかな夕陽に染まっていた。空はオレンジから紫、そして深い蒼のグラデーションを織りなし、遠くにたなびく雲はうすい紫色に染まって空に彩りを添える。

海は空の姿をそのまま映し出し、氷は夕陽のオレンジ色を浴びて、まるで燃える炎の様な姿を現す。その夕陽に彩られた氷の世界の中で、氷雪の民の美男美女たちが普段通りの生活をなし、子供たちは無邪気に遊ぶ・・・・・・・・。

まるで一枚の絵画の様なその世界を自慢するように、セルキーは胸を張って誇らしげに鼻を指でこする。

「どうよ？ ここは夕暮れが一番綺麗なんだ！」

「うわあ、男の人皆イケメンだあ！ 女の子も皆綺麗！」

「って、そっちかい！」

「じょ、冗談よ・・・・・・・・それにしても、すごいなあ・・・・・・・・本当綺麗・・・・・・・・こんな素晴らしい景色、きっと絵でも描ききれないわ！」

「そうだろそうだろ！ この景色を見せたくてさ、時間を計算して歩いてたのさ！」

「そうだったんだ・・・・・・・・そういえば、さっき話してた妹ってどこにいるの？ 早く会いたいなあ」

イリスがそう呟いた瞬間だった。不意に、イリスとセルキーの傍にある雪ダルマの後ろから物音が聞こえた。不思議に思って二人が振り返ると、そこには白いアザラシの毛皮と、白いワンピースを着たセルキーに似た少女が少し怯えながら顔を覗かせていた。

「なんだ、そこにいたのかチョーキー」

「・・・・・・・・」

「うわあ、可愛い〜！ チョーキーちゃんって言うの？ 私イリス。よろしくね！」

イリスが自己紹介しながら手を差し出すが、チョーキーはセルキーの後ろへと逃げだし、彼女

の背後からじっとイリスを見つめていた。

「・・・・・・・・」

「あ、あれ？」

「悪いなイリス。こいつちょっと人見知りだよ・・・」

「ううん、大丈夫よ。気にしないで」

セルキーと親しげに話すイリスを見て、チョーキーはセルキーの毛皮をギュッと引っ張る。毛皮に痛覚があるのか、セルキーはとても痛そうに声をあげる。

「痛っ、ちょ、チョーキー何するんだよ！ 痛い痛い痛い！ そんなに引っ張るなって！」

「・・・・・・・・お姉ちゃん、どうして人間がここに居るの？」

「・・・・・・・・え？」

チョーキーの言葉から、イリスに対する恐怖と戸惑いが滲み出ている。その言葉を聞いて、イリスは困惑するように声をあげた。

その様子を見たセルキーは何かを思い出したかのように戸惑いの表情を見せていたが、困った様に微笑みながらチョーキーに話しかける。

「・・・・・・・・ほら、お前の大事なプリちゃん」

セルキーは右腕に抱えていたプリちゃんを差し出す。すると、チョーキーは驚きと喜びの表情を浮かべてプリちゃんを受け取った。

「プリちゃん！ えへへ、無事でよかった～」

「きゅう～」

「あれ？ なんかくしゃくしゃ・・・それに濡れてる？」

「きゅきゅう～」

「ああ、それは温泉にちょっと入ってたからな」

「ええ～？ お姉ちゃんずる～い！」

ふくれっ面を見せて怒るチョーキーの様子を見て、セルキーは苦笑いをしながら彼女の頭を優しくなでて話をはぐらかす。

「ああ、いや・・・・・・・・それは置いといて。あのなチョーキー、イリスはな、アタシとそのプリちゃんが危ないところを助けてくれた命の恩人なんだ。だからさ、そんなに怖がらなくいでくれよ。な？」

「えっ？ そうだったんだ……イリスおねーちゃん、お姉ちゃんとプリちゃん助けてくれてありがとう」

先ほどどうって変わり、愛らしくお辞儀をするチョーキー。それに笑顔で答えるイリスだったが、周囲が騒がしいことに気付いた。

周りを見渡せば、遠巻きに数人の若者が、イリスを見てはヒソヒソと声を掛け合っていた。

「なんだって人間がこんな所に……？」

「なんかセルキーが連れてきたみたい」

「マジかよ、さすがあの人の孫だけはある……破天荒にも限度があるっての」

「でもさ、あの娘かわいくない？」

「はぁ？ 何言ってんだってのお前……」

「だったらアンタ、ナンパしてくれば？」

「じょ、冗談じゃないって！ 可愛いって言うただけで、そんな意味じゃないって。大体、なんで人間なんかと……」

「だよなあ。早く居なくなってくれっての……」

彼らの話が少しだけだがイリスの耳にも届いた。自分は歓迎されていない……自覚はしていたけれども、改めて言葉にされ、イリスは顔をうつむく。

「……どうやら私は歓迎されてないみたいね」

「……ていっ！」

「お姉ちゃん！？」

セルキーは何を思ったのか、不意にイリスにデコピンを喰らわした。その様子を見てチョーキーと周りの若者たちは驚く。

「ひゃっ！？ セルキー？」

「いちいち気にすんなよ。誰が何と言おうと、イリスはアタシの命の恩人だよ……な？」

「セルキー……」

「お姉ちゃん。早く帰ろうよ。チョーキーお腹すいちゃった」

「分かってるよ。さ、行こうぜ」

セルキーが歩き出すと、その傍らに張り付くようにチョーキーも歩いて行く。彼女たちの後でイリスは少しうつむいていたが、首を横に振ると笑顔を作って彼女たちの後を歩いて行った。

彼女らを見送った後、若者たちも自然とその場から離れ、辺りに再び静寂が戻った……。



## 祖母の悪友

---

「うわあ、おっきい・・・・・・・・！」

集落でひときわ大きななかまくら。ここがセルキーとチョーキーの家だった。その大きさにイリスが思わず驚嘆する。家を褒められたのがうれしいのか、セルキーは再び誇らしげに鼻を指でこする。

「へへっ、これでも一応集落の長の孫娘だからな！」

「ええっ！？ セルキーって意外とすごいよね……」

「意外とってのは余計だよ」

「そう言えば、こっちへ来る途中でおじいさんが居るって話してたけど・・・・・・・・その、私が居ても大丈夫なの？」

「構いやしないよ。むしろ祖父ちゃんも喜ぶぜ、なんせ久々の人間だからよ。多分イリスが言ってたそのハヌイって奴と仲良くしてたのも祖父ちゃんだろうし」

「そ、そう？ ならいいんだけど……」

「お姉ちゃん。早く入ろうよ」

「そうだな。んじゃあ改めて歓迎するぜイリス！」

セルキーはかしこまった様にお辞儀をしてイリスを迎え入れる。その様子がおかしかったイリスがクスリと笑うとセルキーもニカッと笑ってドアを開けた。

ドアを開けて中に入ると、外とは打って変わって驚くほど暖かかく快適な空間が広がり、その奥に彼女らを出迎えるように、優しい雰囲気醸し出す初老の男性が椅子に腰かけていた。

「ただいまあ〜」

「ただいまあ〜祖父ちゃん帰ったぞ」

「おお、戻ったかお前達。ん？ その娘は……？」

「ああ、こいつはイリス。アタシの命の恩人だよ」

「初めまして、イリス・イヴィエールです」

自己紹介をしてお辞儀をするイリス。一方、その名を聞いてセルキーの祖父は驚きを隠せないと云ったような顔つきでイリスをまじまじと見ていた。

「イ、イヴィエール・・・・・・・・じゃと！？」

「？ どしたよ祖父ちゃん」

「え？ あの……どうかしましたか？」

「イヴィエール、その銀の髪・・・・・・・・おお、もしやおぬし『デル族』だな？」

「デ、デル族う！？」

デル族という言葉にセルキーは驚き、チョーキーも同じようにイリスを見つめていた。彼ら『氷雪の民』も、デル族の神秘的な能力は知っていたのだ。

一方のイリスは長い銀髪をくるくると指で巻きながら、彼らの視線に少し恥ずかしそうに答えた。

「え、ええ・・・・・・・・そう、ですけど」

「つまりおぬしはマリヌの孫娘か・・・・・・・・昔のあ奴そっくりじゃわい。まさか、こんな日が来るとは思ってみなかつたのお・・・・・・・・うっ、うっ」

「おい祖父ちゃん。何泣いてんだよ」

「おじいちゃんどうして泣いてるの？ 悲しいの？」

「違うんじゃないよチョーキー。嬉しいんじゃない、まるであ奴がここに来てくれたようでお・・・・・・・・」

イリスが来た事をまるで懐かしむように、嬉しさのあまりに涙を流すセルキーの祖父。一方で、その祖父の口から祖母マリヌの名前が出たことで、イリスも驚きを隠せなかった。

「マリヌ？」

・・・・・・・・あの、おじいさん。ひょっとして私の祖母の事を知っているのですか？」

「ああ勿論だとも。昔ワシはマリヌと各地を旅していた仲間だからのお」

「「え・・・？ ええ～っ！？」」

驚愕の事実を知り、イリスとセルキーが同時に驚く。そしてセルキーは問い詰めるように祖父の肩に手を伸ばす。

「どう言う事だよ祖父ちゃん！ 昔ヤンチャして回ってた仲間の孫がこのイリスって事！？」

「く、詳しく教えてくれませんか！？」

「ああ～、積もる話は飯を食べながらにしよう。セルキー、晩飯頼んだぞ」

「分かってるって。今日は腕によりをかけてとびきり上等なの食わせてやるから覚悟しとけよ！」

「お姉ちゃん、チョーキーね、シチューがいいな。ケモノプリリンのお肉たっぷりのシチュー♪」

「りょーかい！」

「ぎゅっ！？ きゅうう！？」

「ふふふ。大丈夫だよプリちゃん、プリちゃんはまだ食べないから♪」

にっこりと笑顔でそう言いながら、チョーキーはプリちゃんを撫でる。一方のプリちゃんは気

が気でならないのか、恐れるように体を震わせていた。

「きゅうう・・・・・・・・（ガクガク）」

「・・・・・・・・た、食べちゃうんだ」

「？ うん、そーだよイリスおねーちゃん。いくら可愛くても、この子たちはほーぼくしてる家畜なの。それがどういう意味くらいチョーキーでもわかるよ。それに、ケモノプリリンって可愛いけどすごく美味しいんだよ〜」

あ、でも。プリちゃんはもっともっと大きくなって、じゅみよーで死んじゃった後に食べてあげるの。それがくよーだってチョーキーは思うんだ！」

「そ、そうなんだ・・・・・・・・意外としっかりしてるのねチョーキーちゃんも」

「意外とってのはよけーだよ」

子供扱いされたのが不服なのか、チョーキーがふくれっ面を見せると、セルキーの祖父は笑い声をあげた。

「はっはっは！ こりゃ将来は大物じゃわい」

「むゝ〜〜・・・・・・・・おじいちゃんまで・・・・・・・・」

「ふふっ・・・・・・・・あ、そういえばおじいさん。つかぬことをお聞きしますが・・・・・・・・」

「うん？ なんじゃね？」

「あの、おじいさんの知り合いにハヌイという方はいませんか？ 私、実はハヌイおじいさんから友人の方に手紙を持ってきてるんです！」

イリスの口からハヌイの名前が出たことで、今度はセルキーの祖父が驚いたように声をあげた。

「なんと！ お主はハヌイの知り合いであったか！」

「じゃあやっぱり・・・・・・・・あなたがラッキーさんなんですね！？」

「・・・・・・・・う・・・・・・・・うんむ。そ、そうじゃな・・・・・・・・」

イリスに自分の名前を呼ばれたのが恥ずかしいのか、ラッキーは顔を隠す様にアザラシの皮をかぶる。

「・・・・・・・・いやまったく、この名前のせいでラッキー爺さんなどと呼ばれて、長老としての威厳がいまいちなのがたまに傷じゃわい・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・でも、私は良い名前だと思います！」

「うん。チョーキーもおじいちゃんの名前だいすきだよっ！」

「アタシもー」

「ごほん・・・・・・・・それは置いておくとして、イリスさんや、ぜひともハヌイの手紙を見せて

はくれないかな？」

「あ、はいっ！」

ラッキーに促される様にして、イリスはポーチからハヌイの手紙を取り出す。イリスからハヌイの手紙を受け取ったラッキーはその内容を頷く様に見ていたが・・・やがて、彼の目頭から涙がつうーっと流れ、ラッキーはそっと涙を拭いた。

「ははは、あいつも変わっておらぬなあ・・・あれからずっとワシを心配してくれてたのか・・・」

「ハヌイおじいさんは・・・死ぬ前に一度酒を酌み交わしたいって言ってました。だから、その・・・」

「言いたいことは分かってるよ・・・じゃがなあ、ワシは見た目はまだ若く見えるかもしれないが、もうあの雪原を超えてエリアスに行くまでの体力は無いのじゃよ・・・ワシもあいつもお互い年をとり過ぎたな・・・」

「そう・・・ですか・・・」

「代わりと言っては何だが、ワシもハヌイに手紙を書くでしょう。イリスさんや、すまないがその手紙をハヌイに渡してはくれぬかのお？」

「も、もちろんです！」

「よーしできたぞ～！ アタシ特製、ケモノプリリンシチューと、ホワイトビードルのカリカリ揚げ！」

ラッキーがハヌイの手紙を見ている最中に、料理を完成させたセルキーがテーブルに大きな寸胴をドンと乗せ、皿にシチューを盛る。そして、大きな皿にホワイトビードルの素揚げが形そのままに乗せられていた。

「うわあー！ ホワイトビードルもあるんだ。お姉ちゃん今日は豪華だね～！」

「おお、こりゃあうまそうなホワイトビードルじゃわい！ 足が大きくて肉付きもよさそうじゃ」

「だろだろ？ ん？ どしたのイリス、腹の調子でも悪いのか？」

チョコキー達はその大振りのビードルの足を見て嬉しそうに声をあげるが、イリスは姿そのままのビードルの揚げ物を見て、軽く・・・いや、かなり引きつった表情をしていた。

「う、ううん。そういうわけじゃないんだけど・・・」

「ああ、イリスさんの所ではビードルを食べる習慣はないのじゃな。

まあ、はじめて見る人には奇妙に思えるかもしれぬが、こういう場所では野菜も生えぬし、食べ物も乏しいのでな。これも立派な食材なんじゃよ。それにこう見えて、昔はエリアスでも食べられていたほどの伝統ある食材だからのお」



「美味しく食べれるものは何があんでも食べないと、生き残れないのが氷の世界なんだよ、イリスおねーちゃん！」

「ああ、そうだったのか……でもまあ安心しなよ！ 見た目は悪いけど、すっげえ美味いんだから。騙されたと思って食ってみなって」

「う、うん……わかった！」

覚悟を決めたイリスはセルキー達に遅れて食卓に着く。ラッキーが手を合わせると、セルキーとチョーキーも手を合わせる。イリスもそれに倣って手を合わせるとラッキーが感謝の言葉を述べる。

「長きにわたりこの土地を守って来た先祖たちよ。我らは今日もこうして生きる糧を得られる事が出来ました。この素晴らしい命に感謝をこめて……頂きます」

「「頂きます」」

「い、頂きます」

「さあ、イリスさんやどうぞたと食べてください。セルキーの料理は集落一でな」

「ほら、こうやってがぶってやってみなよ！ 美味しいぞお～！」

そう言って、セルキーは自ら作ったホワイトビードルの素揚げの足をもいでガブリとかぶりつく。イリスもそれに倣い、恐る恐るながらもホワイトビードルの足をもぎ……思い切りかぶりついた！

もぐもぐとゆっくり咀嚼しながら……ごくりとその肉を喉の奥に流し込んだイリス。そして……

「お、美味しい～～～っ！！ すっごく美味しいよセルキー！！！」

想像よりも柔らかくぷりぷりとしていて臭みの無い虫の肉に、セルキー自慢の調味料の味がしみ込んで、まるで高級なエビを食べているかのようなその味わいにイリスは思わず歓喜の声を漏らす。

それを皮きりに、イリスが美味しそうにホワイトビードルの足にかぶりつく姿を見て、セルキーはほっとしたように溜息を洩らした。

「良かったあ……気に入ってもらえてアタシもうれしいよ。ほら、シチューも食べてくれ。エリアスで仕入れた野菜もたっぷり入ってて栄養抜群だからさ！」

セルキーに勧められるまま、イリスはシチューを一口頬張る。とろとろに解れたケモノプリリンの肉から肉汁があふれ出し、野菜のうまみと合わさってえも言われぬ幸福感にイリスは包まれる……。

「ふわあ～～．．．．．お肉がとろとろで、とっても美味しい～～～．．．．．！ セルキーって料理上手なんだあ、羨ましいなあ」

「まあ、料理は上手だけどそれ以外は結構不器用なんだぜ？ 裁縫なんて、からっきしだし．．．．．」

「ええー？ そんなことないよ！ 私なんて料理もできないし、掃除しようとして逆に散らかっちゃうし、方向音痴だし、踊りもヘンテコだし、歌だって．．．．．うう、自分で言っていて情けないなあ．．．．．」

「はっはっは。マリ又そっくりじゃのお、マリ又も戦闘以外はからっきしじゃったからのお。『デル族』は闘いの間は凄い力を発揮するが、それ以外はからっきし．．．．．というのが多いのかものお」

「うーん．．．．．そういえば料理とか作ってたのもお父さんだった気がする．．．．．お婆ちゃんやお母さんが手の込んだ料理作った所なんて見たことないかも．．．．．」

「ははは。まあ、積もる話は後にして、早く食べてしまいなさい。じゃないと、皆チョーキーに食われてしまうぞ？」

「え．．．？」

「あゝっ！ チョーキー！ ホワイトビードルの腹はアタシが楽しみに取っておいたのに！」

「(もぐもぐ)．．．．．ふっふっふ、じゃくにくきょーしょくだよお姉ちゃん(ごくん)」

「ちっくしょー．．．．．！ イリス、こっちはシチューお代わりしまくるぞ！ ほら、ほらほらほら！」

「ちょ、ちょっと待ってセルキー！ 一気にこんなに食べられないよ！」

「ああ～～～っ！ お姉ちゃんひどーい！」

「はっはっはっは。こんなに賑やかなのは久しぶりじゃのお．．．！」

食べ物を獲りあうイリスたちの姿を見て、ラッキーは感慨深げにそう声を漏らしていた。そして、争奪戦と化した夕食が終わり、イリスは食後のデザート代わりにチェリー、ソーダ、ラベンダー．．．3色のクッキーを取り出し、セルキー達に振舞う。

「おおー、これすごく美味しいイリス！ なんだか力が湧いてくる気がするよ！」

「おいしい～！ イリスおねーちゃんありがとう！」

「ふふ．．．．．御馳走になってばかりじゃなんだか気が引けるもの。たくさんあるからどんどん食べて！」

「懐かしいのおこの味。マリ又ともこうやって茶菓子代わりに旅の途中で食べてものじやお．．．．．」

「．．．．．あの、ラッキーさん。もしよろしかったら、お婆ちゃんとの旅の話を聞かせてはくれませんか？」

「ん？ おお、いいともいいとも！ そうじゃのお．．．マリ又と初めて会ったのは山岳地帯じゃったのお。あのころのワシは『氷雪の民』の掟にうんざりしてて、自由を求めて反発し

ておったわ。

ハヌイと会ったのもそのころじゃのお。いや懐かしいのお・・・・あのころは自分は最強だと思っておったが、山岳地帯を縄張りになっていたベアーウルフや獰猛なタイガーに襲われて苦戦しておったわ。

そんな時にふらっと現れたのがマリヌじゃった。マリヌはワシの前に立つと、ワシに敵意を向けていたモンスターたちに向かってにっこりとほほ笑んだ。ただそれだけで敵意を向けていたモンスター達を大人しくしてしまったのじゃ」

「そうなんですか・・・・お婆ちゃんすごかったんだあ・・・・！」

「ワシも最初は驚いてしまったが、その不思議な魅力に惹かれてつい、マリヌと共に行動したのじゃ。どうせ目的もなかったからのお・・・・マリヌは当時『アガシュラ』に苦しめられていたベスの民を助けるために旅に向かっておってな、そこで活躍すれば英雄になれると、ワシも軽い気持ちで張り切っておったわい」

「ハハッ！　なんだ、祖父ちゃんも案外単純だったんだな！」

「あのころは何も知らない若造ただだけじゃわい。じゃが、マリヌと旅をしているうちに『アガシュラ』に人生を狂わされた人々を何度も見てのお・・・・自分がいかに恵まれていて、それでいて浅はかな奴だったか、思い知らされたのお・・・・」

そしてベスにたどり着いたワシ達は、ベスを苦しめていた『アガシュラ』の巫女『コア』と、『アガシュラ』に魂を売って魔物と化したかつてのベスの王『ラビナ』と壮絶な激闘を繰り広げたものじゃ。ワシも善戦したのじゃがマリヌには到底かなわなかったのお・・・・」

「ふーん、イリスおねーちゃんのおばーちゃんって、とっても強かったんだ！」

「まあのお。実際、『コア』と『ラビナ』を打ち倒したのもマリヌじゃった。じゃが、マリヌと言えど苦戦していた。ワシは自分の無力さを呪い、そしてマリヌを守りたいと強く願った。そしたらのお・・・・『アイスエッジ』を作り出す事が出来たのじゃよ」

「アイス・・・・エッジ？」

「アイスエッジってのはね、私たち『ひよーせつのみ』が『ビントー』を封じるときに使った、魂でできた氷の武器なんだ！　人によって槍とか～、剣とか～、爪とか～魂の数だけ色々な武器になったんだよ！

昔は私たちみーんなそれを作れたんだけど、今じゃあお爺ちゃんでももう作れないの。だから、今はもうおとぎ話みたいな話なんだ～」

「へえ～・・・・」

「アタシも祖父ちゃんの話は大概信じてるけど、その『アイスエッジ』を作ったっていう部分だけはどうにも信じられないんだよなあ・・・・」

「なんじゃと失礼なっ！？　ワシが『アイスエッジ』で氷の槍を作り、アリババがエルパの聖獣『スフィンクス』の力の籠った短剣に宿った力を引き出して放った『双龍砲』と、マリヌの弓と矢の代わりとして渡したワシの氷の槍の一撃が合わさったからこそ、『アガシュラ』を倒す事が出来たんじゃぞ！」

「へーへー、そういう事にしとくよ。それで、その後どうなったんだよ？」

「・・・・力を合わせて『アガシュラ』を見事打ち果たしたワシらは、それぞれの故郷へ帰

って行ったのお……いや、アリババはそのままベスに残ったんじゃない。その後ワシはこの集落に戻って、エリアスの者たちと交友を広めようと説得したのじゃ。

幸い、当時のエリアス王をワシらが『アガシュラ』から救ったから、すんなりと交友は結ばれたのじゃ。あの時は本当にうれしかったのお……」

「……そうだったんですか。ラッキーさんは本当にすごい人ですね」

イリスがそう言うと、不意にラッキーは浮かぬ表情で首を横に振って深いため息をついた。

「じゃがのお……北群と名乗るたわけの挑発に乗ってしまって、ワシは交友を絶ってしまった……これから先はどうなる事かのお……」

「あ、あれは祖父ちゃんのせいじゃないよ！ 悪いのは皆北群じゃないか、あいつがアタシを殺そうとしたのを祖父ちゃんが止めてくれなかったら、今頃アタシは……っ！」

「それはそうじゃが……じゃが、一度壊してしまった関係を修復するのは難しい……もう一度エリアスと手を結べる日は来るものかのお……」

「あ……それなら多分大丈夫です。私たちはその北群が『アガシュラ』だった事をラジャータ陛下にちゃんと説明して、不本意ですけど彼を倒しましたから……すぐにとは行かないかもしれませんが、きっとまた仲良く手を結べるはずですよ！」

イリスが強い瞳でそうラッキーを諭す。その姿を見て、ラッキーにはイリスの姿が、あの日のマリヌの姿と重なっていた。思わず、ラッキーは涙をこぼしながら笑い声をあげる。

「……っ！ ははははは、やはりお主はマリヌそっくりじゃのお……お主がそういうと、何もかもうまくいきそうな気がするよ」

「そ、そうですか？ な、なんかそう言われると照れちゃいますよ……！」

「マリヌもこんな孫を持って幸せ者じゃのお。ところでイリスさんや、マリヌは元気にしておるのかい？ なんだったらマリヌにも手紙を届けてほしいのじゃが……」

ラッキーがそう呟いた瞬間だった。先ほどまで笑顔を見せていたイリスは一転して無表情となり、顔をうつむかせる。そのあまりにも激しい変わりように、ラッキー達が不思議に思う中で、イリスはゆっくりと重く口を開いた。

## セルキーの決意

---

「・・・・・・・・祖母は、もういません。殺されたんです・・・・・・・・『アガシュラ』に！！」

「っ！？ な、なんじゃと・・・・・・・・！？」

突然知らされたマリヌの死にラッキーが驚く中、イリスは言葉をつづけた。

「祖母だけじゃないんです。事故で死んだと思われていた私の両親も、同じように『アガシュラ』に殺されたのを最近知って・・・・・・・・私は、それが許せなくて、こうして旅に出てるんです」

「・・・・・・・・両親もだって・・・・・・・・？ イリス・・・・・・・・じゃあ、お前が旅に出てる目的ってのは・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・そうよセルキー、私は『アガシュラ』に復讐するためだけに旅をしているの。私はマリヌお婆ちゃんみたいに、誰かを助けたいって思って行動してるわけじゃないの・・・・・・・・ただ、私の大切なものを奪った『アガシュラ』が、憎くて憎くて仕方ないだけなの・・・・・・・・っ！」

イリスの瞳から大粒の涙がこぼれ、イリスは机に顔を伏せて呻く様に泣き始める。祖母だけではなく、両親まで奪われた・・・・・・・・その言葉がセルキーの胸に深く突き刺さる。

セルキーはイリスに近づくと、そっとイリスの肩に手を添える。

「イリス・・・・・・・・ずっと、辛い思いをしてたんだな」

「・・・・・・・・ぐすっ。ひっく・・・・・・・・幻滅しちゃった？」

「そんな事ないさ！ 自分の大事なものを奪った奴が許せないって気持ちはよく分かるよ。もっと怒ったって良いんだ！ 泣いたって良いんだ！ だから・・・・・・・・そんなに自分を責めないでくれよっ！」

「ぐすっ・・・・・・・・セルキー・・・・・・・・・・・・・・・・うわああああんっ！！」

セルキーの言葉を受けて、イリスは少し楽になったのか、さらに涙をぼろぼろとこぼしながら彼女に抱きつく形で涙を流す。そんなイリスの姿を見て何かを決意したのか、セルキーはラッキーを見て声をあげた。

「なあ、祖父ちゃん・・・・・・・・アタシさ、イリスに付いて行ってもいいかな？」

「・・・・・・・・え？」

「・・・・・・・・」

「お、お姉ちゃん・・・・・・・・どうしたの急に！？」

「急にじゃないよ。アタシ、祖父ちゃんの話小さいころから聞いてて、前々から外の世界へ行ってみたいってずっと思ってたんだ。それに、今のイリスを見ていると、アタシもその『アガシ

ユラ』ってのが許せない・・・・・・・・そいつらのせいで誰かが悲しい目に会うなんて嫌だ！

・・・・・・・・イリスはアタシの命の恩人だ。だから、今度はあたしが恩返ししたいんだ。あ、言っとくけど別に復讐を手伝うつもりじゃないよ。ただ・・・・・・・・イリスの傍に居て、少しでもその悲しみをとってあげたいんだ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・セルキーって、やっぱり優しいんだね」

「でも、でも、お姉ちゃんが居なくなったら困るよお～～！ おじいちゃんも止めてよ～～！」

「・・・・・・・・」

ラッキーは先ほどから一言も声を発していない。それがセルキーの不安を掻き立てる。やがて、ラッキーは重い腰をあげると、ゆっくりと口を開いた。

「セルキー」

「・・・・・・・・っ」

「良く言った。お前の思う通りにするがいい」

「！ ほ、本当か祖父ちゃん！？」

「うんむ。世界は広い、イリスさんと共に旅をしながら世界を見てきなさい。『百聞は一見に如かず』・・・・・・・・龍京で教わった言葉じゃ。ワシの話を100回聞くよりも、お前の目で直に見たほうがお前のためにもなるからのお。

色々な事を学んで、いろんな出会いをして・・・・・・・・そして、いつかここへ戻ってきて、ワシの後を継いでくれ・・・・・・・・未来を作るのはお前たちなんじゃからのお」

「・・・・・・・・おじいちゃん？ 何言ってるの・・・・・・・・？ お姉ちゃんがいなくなっちゃったらチョーキー・・・・・・・・ぐすっ、チョーキーは・・・・・・・・」

「チョーキー・・・・・・・・確かにワシもセルキーと離れるのはさみしい。じゃがな、セルキーはイリスさんと出会った事で、この世界と向きあおうと・・・・・・・・『あの時』から変わろうとしておるんじゃ。それをワシらが止めるわけにはいかん。

なあに、ワシらだけでもなんとかなるわい。じゃから泣くのはおよし。のお？」

「・・・・・・・・ぐすっ。わかった、チョーキー泣かないよ。お姉ちゃんと離れるのはさみしいけど、チョーキー我慢するもん」

「・・・・・・・・チョーキー、ごめんな」

「いいの。でもねお姉ちゃん、チョーキーね、ひとつお願いがあるの。チョーキーね、いろんな世界の珍しいお菓子とか食べてみたいの、だからいっぱい持って帰ってきてほしいな」

あ、あとね帰ってくるときにはおじいちゃんみたいにすっごいぎょーを達成して、凄い人になって帰ってきてね？ じゃないとチョーキーぐれちゃうからね！」

「ハハッ。それじゃあ2つじゃないか・・・・・・・・分かってるよ。アタシも祖父ちゃんに負けないくらい凄い冒険をして、世界中に『氷雪の民』の凄さを思い知らせてやるよ！」

「はっはっはっはっは！ 若いのはそれくらいでないといかんのお。他の若者たちにも今のセルキーを見せてやりたいものじゃのお！」

「・・・・・・・・へへっ。そう言われると照れちゃうよ！」

「さて、そろそろ夜も更けてきた。明日は早く出かけるつもりじゃろ？ 早く風呂に入って寝てしまいなさい。もう沸かしてあるでのお・・その間にワシはハヌイに手紙でも書いておくわい」

「分かったよ祖父ちゃん。さ、イリス。一緒に風呂入ろうぜえ！」

「う、うん・・・・・・・・」

「チョーキーも入るー！」

ラッキーに促されるまま、イリスたちは備え付けの風呂場へと入る。大人3人は余裕で入る程の、大きな丸太をくりぬいて作られた浴槽にはなみなみとお湯が張られていた。イリスが服を脱ぎ終わるのを見計らって、一糸纏わぬ姿のセルキーが強引にイリスを風呂の中へと押し込んだ。

「ほらほら、お前の入りたがってたお風呂だぜ！」

「ちょ、ちょっとまってセル・・・・・・・・きゃあー！」

激しい水しぶきを立てて、イリスが風呂の中へ突き落とされる。口からぴゅーと鉄砲魚のようにお湯を吐きながら、イリスは咳き込んでいた。

「ぷはっ！ けほけほ・・・・・・・・んも～セルキーひどーい・・・・・・・・」

「あはは、悪い悪い」

悪びれた様子でセルキーも入り、その後からチョーキーも豪快に飛び込んで水しぶきを上げて入って来た。そしてイリスと同じように口からぴゅーとお湯を吐きだす。

「へへ～イリスおねーちゃんのまね～」

「もうチョーキーったら・・・・・・・・」

「あはは・・・・・・・・それにしても今日は豪華な風呂だなんて、祖父ちゃんも見栄を張りたいんだなあ」

「え？ そうなの？」

「普段はね～集落の皆が入るサウナに行ってるもんね～。氷をわざわざ持ってきて、薪で燃やして入るお風呂をするのは私たちの贅沢なんだよ～」

「・・・・・・・・なんだか今日は贅沢尽くしだな～・・・・・・・・」

「温泉が毎日使えればそんな事ないんだけどなあ・・・・・・・・まあいいか。パーッと忘れて今日の疲れをとっちゃおうぜ！」

「うん！ はあ～・・・・・・・・気持ちいいなあ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

今日一日の疲れをほぐす様に、イリスがのんびりとしていると、突如セルキーがイリスの腰に手を伸ばす。

「ひゃっ！ ちょっとセルキー何してるの！？」

「え〜？ サービスで腰とか胸とか揉んでやるって連れてくるときに言ったじゃんかよ〜？

うはあ、スベスベだなあイリスの肌」

「あれはセルキーが冗談って……ひゃん！ どこ触ってるのよ！」

「うりうりここか？ ここがいいのか〜？」

「ちょ、ちょっと止めてって……そ、そこはあ……っ！」

「チョーキーももみもみする〜！」

「えっ！？ ちょ、ちょっと……きゃああああああっ！！」

イリスの叫び声を皮きりに、風呂場から騒々しい声が響く……ハヌイへの手紙を書き終えたラッキーは呆れたように溜息をついていた。

「……やれやれ騒々しいのお。こりゃあ当分は上がってこぬかのお……仕方あるまい、サウナの方へ行くとするか……先に風呂に入っとけばよかったのお……  
・はあ」

先に入れておけばと後悔しながら、ラッキーはサウナへ向かう旨のメッセージを紙に書き残すと、家を開けてサウナへと向かっていった。

それから数十分が過ぎたころ、漸くイリスたちが風呂からあがってパジャマに着替えていた。イリスはムスツとした表情でセルキーを睨んで、セルキーはそんな彼女をなだめるようにはにかみ、チョーキーは楽しかったと言わんばかりに瞳をキラキラと輝かせていた。

「んもう〜セルキーの馬鹿っ！」

「あははははは……いいじゃん、あれくらい。スキンシップじゃないかよ〜」

「むう〜〜〜……」

「あ……いや、その、そんなに怒らないでよ。イリス……」

「楽しかったなあ〜。こんなに楽しいお風呂本当に久々だったよ！ イリスおねーちゃんたちが帰ってきたら、また一緒にお風呂でもみもみしようね」

「……う、うん……あれ？ ラッキーさんは？」

「え？ 祖父ちゃんどこ行ったんだ……？ ん？ 何々……『時間がかかりそうなのでサウナへ行って来る。ラッキー』……祖父ちゃんすねてやがる」

「おじいちゃんもお風呂大好きだもんね〜」

「仕方ないな……また風呂を沸かしなおしとくか。あ、イリス。アタシはもう一回風呂を沸かすから、先にチョーキーを寝かしつけててやってくれないか？ 寝床はそっちにあるから」



「うん、わかった．．．．．行こうチョーキー」

「うん」 ねえねえ、イリスおねーちゃん。チョーキーね、寝ちゃう前にご本読んでほしいの」

「ふふ．．．分かったわ。それじゃあ行きましょう」

ついさっきまでイリスに怯えていたチョーキーが、まさかあそこまで懐くとは．．．．．少し寂しいと感じながらも、セルキーは嬉しさのあまりに笑みをこぼしていた。そして、新しくお湯を沸かすために家の裏へと回った。

「『この厚化粧！』そう言って妖精の王様は花瓶を投げつけます。投げつけられた王女様は花瓶をよけると怒ってこう叫びました。『なんですって！ あなたこそ、その厚底靴何とかしなさいよ！』そう叫んだ王女様は掌からビームを放ちました」

「きゃはははは」 いいぞいいぞもっとやれ～！ それで、この後はどうなったのイリスおねーちゃん？」

「えーと．．．．．王様はビームをバリアーではじくと、王女様と取っ組み合いのけんかを始めてしまいます。そしてお互いに距離を取ると、息を合わせて同時にビームを撃ちました！

さあ大変なのは城に招かれたおとぎの国の住人達。王様たちのビームを浴びて、ある者は石に、ある者はプリリンに、あるものはわけのわからない生き物に変えられてしまって大騒ぎです。

『このままではおとぎの国がおかしくなっちゃうよ～！』そうロバが叫んだときでした。白鳥頭の王子ローエン格林が颯爽と現れて言うのでした『いい加減にしたまえオベロン王、タイタニア王女！ 私の美しさに免じてけんかはおよしなさい！』

その言葉を聞いた王様たちは．．．．．って、眠っちゃったか」

「すう～すう～．．．．．むにゃむにゃ、えへへ～イリスおねーちゃんだいすきだよー」 お姉ちゃんもだあいすき」

「ふわあ～．．．．．私も眠くなっちゃった。もう寝ようかな．．．．．それにしても、何だったんだろうこのお話．．．．．」

チョーキーがすやすや眠ったのを確かめると、イリスも本を閉じてすやすやと眠る。セルキーはお湯を沸かし直し、家の中に入って寝室で眠るイリスたちの寝顔をのぞきこんでクスリと笑う。

「まったく．．．．．アタシよりも姉妹みたいにして寝てるじゃないか」

セルキーがそう呟いた直後、サウナから戻って来たラッキーの声が聞こえてくる。

「おーい、戻ったぞーい」

「しーっ！ 今イリスたちが眠ったばっかなんだから．．．．．」

「お、おお．．．そうかい」

「ああ、そうそう。風呂は沸かしなおしておいたよ祖父ちゃん、入りなおしてきなよ」

「おやおや。わざわざそんな気遣いせんでもよかったのにお……」

「暫く祖父ちゃん達に会えないんだからさ、これくらいの孝行はさせてくれよ？ それじゃ、アタシもそろそろ寝るから……ふああああ……お休みい〜」

「うんむ、しっかりと眠るんじゃぞ。どれ、ワシはお言葉に甘えて風呂に入るとするか……」

ラッキーが風呂場へ向かうのを見送って、セルキーも眠たそうにあくびをしながら、イリスの隣に潜り込んで眠りにつく。セルキーが布団に入って目を覚めたのか、イリスが声をあげた。

「んっ……セルキー……？」

「あっ、悪りい……起しちまったか？」

「ううん。気にしないで……すぐ眠れるはずだから……」

「……そっか」

そう言うと、イリスは再び寝息を立て始めた。イリスが眠ったのを確認して、セルキーは囁くように独り言をつぶやく。

「イリス……お前に会えて、本当に良かった……。もう一度人間を信じられる事が出来たのも、お前のおかげだよ……ありがとうな、イリス……」

そう呟くと、セルキーもすやすやと寝息をたてて眠り始めた。

風呂に入りなおして上機嫌になったラッキーが寝室に顔をのぞかせると、そこにはまるで姉妹の様にすやすやと仲良く眠る3人の少女たちの姿があった。

ラッキーは少女たちのずれていた布団を戻してあげると、別のベッドへもぐりこみ、イリスとの出会いをマリヌに感謝しながら眠りについた。

——翌朝

「……ふわあ、よく寝たあ〜〜」

大きな伸びをしながら、イリスが目を覚ました。ふと、辺りを見渡せばセルキーの姿が見当たらない。不思議に思って家中をきょろきょろと見渡してみるが、やはりどこにもいなかった。

一体どこへ行ったのだろうと思ってイリスが首をかしげていると、先に起きていたチョーキーがイリスに声をかける。

「イリスおねーちゃんおはよう。どうかしたの？」

「あ、チョーキーおはよう。あの、ラッキーさん。セルキーが見当たらないんですけど、どこか

心当たりありますか？」

「ああ、あの子なら今朝早く『厳冬のラビリンス』に向かって行ったよ。ここを離れる前に最後に両親に報告するとな」

「・・・・・・・・両親？　そういえば昨日もみませんでしたけど一体・・・・・・・・」

イリスが言いかけたのを手で制して、老人は静かに首を振った。チョーキーもなぜかふさぎ込むように顔を俯ける。その反応を見て、昨夜の自分の姿を重ね合わせたイリスが悪い予感を感じてる中、ラッキーが声を出す。

「・・・・・・・・ちょうど1年前じゃよ。ラビリンスに封じ込めた『ビントー』の封印を確かめるために出かけたっきり・・・・・・・・帰ってこないのじゃ」

「・・・・・・・・っ！　まさかそれって!？」

「それ以上は言わないで下され。あの子ももう分かってる・・・・・・・・これがあの子なりのけじめのつけ方じゃよ」

「あのね、お姉ちゃんね、おとーさんとおかーさんが居なくなっただけで、ラビリンスの前で帰って来るって信じて待ってるの。チョーキーもきっと生きてるって信じたいけど・・・・・・・・もう1年になっちゃった・・・・・・・・」

「息子達が居なくなっただけで、あの娘は外の世界に全く興味を失くしておった。完全にふさぎこんでしまい、生きる事にもどこか諦めていた・・・・・・・・じゃが、イリスさんと出会った事であの娘はまた笑顔を取り戻してくれんじゃ。

昨夜のあの娘の姿・・・・・・・・本当に久しぶりじゃったのお」

「そう・・・・・・・・だったんですか」

「・・・・・・・・すまないがイリスさんや、あの娘を迎えに行っちゃってやってはくれないかのお？　ワシは少しやる事があるでお・・・・・・・・」

「あのね、チョーキーやプリちゃんも一緒に行った事があるから、プリちゃんが案内するの」　本当はチョーキーが案内したいけど、チョーキーもね、お姉ちゃんに渡すアクセサリーを作ってあげたいの」

「分かったわ。プリちゃん、案内よろしくね」

「きゅううう～～っ!!」

「それじゃあラッキーさん、チョーキー。私、セルキーを迎えに行ってきます！」

「うんむ。気をつけてな」

「イリスおねーちゃん、滑って転んじゃ駄目だよ～！」

「う・・・・・・・・うん。努力してみる。行こうプリちゃん」

「きゅっきゅう～～！」

プリちゃんに案内されるまま、イリスは防寒着を纏って厳冬のラビリンスへと向かった。

イリスを見送った後、チョーキーはセルキーに贈るためのアクセサリーを作り、ラッキーは自分が大切にしている棚の中から小さなあるものを取り出し、丹念に磨き始めた。ラッキーが磨い

ているものを見て、チョーキーは興味深々と言った感じで、それを眺めて声を出す。

「おじいちゃん、なにそれ？ とってもきれーい・・・・・・・・ピカピカだ〜！」

「うん？ ああ、これはマリヌからもらった大切なものでな。せっかくじゃし、この際イリスさんに渡そうと思ってのお・・・・・・・・」

「マリヌさんからの貰いもの？ あっ！ おじいちゃんひょっとして、マリヌさんの事好きだったの〜？」

「ああ。大好きじゃったのお・・・・・・・・」

「ふ〜ん・・・・・・・・ねえねえ〜おじいちゃん、マリヌさんとの冒険で告白とかしたの〜？」

「う・・・・・・・・うんむ。まあなあ・・・・・・・・」

「おじいちゃんとマリヌさんの話、チョーキー聞きたいなあ〜！」

「分かった分かった。話すからちゃんとセルキーに贈るプレゼントを作るんじゃぞ？」

「うん！」

マリヌとの思い出話をしながら、ラッキーは髪飾りを磨き続ける。チョーキーはその話に一喜一憂しながら、セルキーへのプレゼントを作っていた・・・・・・・・。

## ——巖冬のラビリンス 入口

ラビリンスの入口に小さな白い花を2輪捧げ、何かの決意を表すかのようにセルキーはラビリンスに向かって独り言をつぶやき始めた。

「父さん・・・・・・・・母さん。私ね、人間の友達ができたよ。しかもその子は、昔祖父ちゃんが旅していたころの仲間の孫娘だったんだ。不思議だよね・・・・・・・・これって運命って奴かな？

それでね、私、その子と一緒に色々な場所へ旅しようと思うの。昔からの夢だった外の世界へ出るんだ！ 怒ったり・・・・・・・・はしないよね？ お父さんたちも、祖父ちゃんみたいにきつと笑って見送ってくれるよね？

私・・・・・・・・外の世界へ旅に出て、もっともつこの世界の事を知りたいんだ。そして、その子と旅をしながら、その子を包んでる大きな悲しみを取ってあげたい、癒してあげたい、助けてあげたいって・・・・・・・・そう思ったんだ。

・・・・・・・・だから、今日で父さんと母さんを待つのは・・・・・・・・終わりにしようと思う。でも心配しないで、帰ってきたらきつと・・・・・・・・！」

セルキーが言葉を続けようとしたその時、彼女をあざ笑うかのように迷宮の中からビントーの笑い声が聞こえてきた。

『又ウァハハハハハハ！！ そいつぁ無理ってもんだ！』

「！？」

## 冬の魔王、ビントー

---

迷宮の中からセルキーに向かって、昨日と同じ氷の腕が襲いかかる！ その一撃をかわしたセルキーはその腕が昨日自分を襲ったものと全く同じものだと確認して、驚愕しながら槍を構える。

「なっ、これは昨日の……お前は一体誰だ！？」

『又ウァハハハ！ こりゃ失敬、そういえば自己紹介がまだだったなあ……ではこの場で挨拶しておこう』

そう言うと、迷宮の中から無数の魔物を従えてビントーがゆっくりと姿を現した。その圧倒的な威圧感を放つビントーを目の前にして、セルキーは思わずすくんでしまう。

「なっ、あ……なんだ、お前……」

『又ウァハッハッハ。初めましてプリティガール！ 俺っちはビントー！ 又の名を冬の魔王たあ俺っちの事よ！ んん～、声だけでも素晴らしかったが、顔と言い、身体と言い……  
・良い～いなあ……！』

「ビ、ビントーだって……？ 馬鹿なっ！ お前はアタシ達と雪女の魔力で封印されてるはずだ！ 出られるわけが……」

『又ウァッフフ……確かにその通りよ。だあがあ、それもこれもトクちゃんが1年前から頑張ってくれたおかげでこうして娑婆に出られたのよお。

氷雪の民2匹にい、雪女を全滅させてくれるたあ、最近のアガシュラはやるねえ本当……  
・俺っち感動で涙が出ちまう！！』

ビントーはトクの働きの素晴らしさに感動して、思わず氷の涙……もとい、氷柱をこぼして男泣きをする。その一方で、ビントーの言葉から聞き捨てならない台詞を聞いたセルキーは、槍を身構えながらも、声を震わせてビントーを問い詰める。

「2匹……だと？ まさか……まさかっ！！」

『そうそう、そのまさかさあ！』

「やめろっ！ そんなの嘘だっ！！ 聞きたくないっ！！！」

『ぬうあらあ……感動の再会と行こうじゃないか。俺っちこう見えて、アガシュラでは優しいって評判なのよお。又ウァハハハハハ！！』

セルキーをあざ笑うビントーの口から、ボロボロになったアザラシの皮が2つ吐きだされる。それが何を意味するか……語らずとも理解したセルキーは槍をその場に落とし、ゆっくりと毛皮に近づき、涙を浮かべて毛皮を拾う。

「父さん・・・・・・・・母さん・・・・・・・・っ！」

『ヌウァッフフ・・・・・・・・親孝行だなあ、ますます気に入ったぞおプリティガール！ その親孝行に免じて、俺っちの昔話をしてやろう。

俺っちは冬の魔王と名乗ってはいるが、実際にアガシュラを束ねる【魔王】は別にいるのさあ・・・・・・・・俺っちはその【魔王】から直々に生み出されたアガシュラの一人にすぎないのよお。

まあ俺っちはアグリッパとお前達のせいで、800年前からずっとこの迷宮に封じ込められてしまい、世界を滅ぼすパ〜ティ〜には参加できなかったがな。俺っちがいなかったせいで【魔王】もデル族に封じられちゃった・・・・・・・・』

「・・・・・・・・そんな事、今は関係ないだろ？ どうして父さん達を殺したんだ！ 答えろ！」

『ほお・・・・？ ほおほおほおほお。どうやらそっちの伝承は知られていないのか・・・・・・・・  
・良い〜いだらう。そいつらが犠牲になった理由を教えてやろう。

俺っちは封じられた800年間・・・・・・・・退屈で退屈で堪えなかった・・・・・・・・この迷宮の中の魔物共を屈服させ、支配しても俺っちの退屈は満たされなかった。虚しい日々が続いた・・・・・・・・いっそのまま死にたいって思うほどになあ。

そんな時よ！ 1年前にトクちゃんと名乗るニューフェイスのアガシュラが現れ、我らが【魔王】復活のために俺っちを解放してくれると約束してくれたのさあ！

だが、俺っちは最初疑った。ぬうああせなら、俺っちを解放するためには冰雪の民と雪女共を全員殺し、その魔力を取り込まないと封印が解けなかったからなあ・・・・・・・・ひよろひよろで弱そうなそいつに、お前達を死留められるのは無理だと思ったのさあ』

「・・・・・・・・！？ アタシ達自体が・・・・・・・・お前を封印する鍵・・・・・・・・？」

『ヌウァッフフ・・・・・・・・可哀そうになあ、お前達はアグリッパにうまく利用されたのさあ！

俺っちの封印のために、お前達をこんな何も無い土地に縛り付けたんだ。こんな所業をしたアグリッパを極悪人と言わずに何と言う！？

まあ、俺っちとトクちゃんの相談中に・・・・・・・・運よく？ いや、こいつらには運悪くだったか？ 迷宮へ入り込んだ2匹の冰雪の民をパフォーマンスとしてトクちゃんは瞬殺しちゃった・・・・・・・・俺っちはその時確信した。今のアガシュラ達なら確実に【魔王】を復活させる事が出来ると！ そして俺っちを解放できるとなあ！

そして昨日。トクちゃんはずいに雪女たちを全員始末してくれたのさあ！ おかげで俺っちはこうして迷宮から外に出れるようになったってわけよお。本当なら昨日の晩にでもお前達の集落を潰そうとしたのだが、それを止めてこうしてお前を待ってたのさあプリティガール！』

「・・・・・・・・なんでそんなにアタシにこだわるんだ・・・・・・・・なんでっ！！」

『ヌウァハハハハ！ そりゃあせめてもの俺っちの情けよ。こいつらが居なくなってから毎日毎日、迷宮の外から思い出話をする健気なお前が気に入っちゃってよお・・・・・・・・この1年退屈せずに済んだ。軽く400年は満たされた気分だったなあ・・・・・・・・。』

退屈を紛らわせてくれたお礼に、お前は特別に氷漬けにして俺っちのコレクションにしてやるぜえ。集落でお前達を無差別に凍らせたなら、どれがお前か分からなくなるからなあ・・・・・・・・っ！』

「っ！　ぐああああっ！」

先日と同じようにセルキーを掴み、締め上げるビントー。セルキーは涙を浮かべながらもビントーを睨む。

「くそっ、くそっ……許さねえ。例え氷漬けにされようが、アタシはお前を呪って殺してやる！」

『又ウァハハハ！　良い～いぞお、そそる表情だ。さぞ綺麗なコレクションになるだろうよ……まあそう怒るな。たしかお前の妹の……チョーキーと言ったか？

あいつもお前と同じように氷漬けにしてコレクションにしてやるから、安心して凍れええええっ！！』

「ぐあっ……あぁっ……！　ああああああっ！！」

ビントーがセルキーにとどめを刺そうとした瞬間、光を纏った矢がビントーの腕を砕き、セルキーを解放した。その矢を見て、ビントーは驚きを隠せない。

『又ウァアアアア！？　こいつぁ昨日の……俺っちの腕を砕いた奴だなあ？　出て来おい、デル族の生き残りiiiiiiii！　デル族は抹殺だぁ！　惨殺だぁ！　虐殺だぁあぁあぁあぁ！！』

腕を砕かれ怒り狂ったビントーの前に、同じく怒りの表情を浮かべたイリスが姿を現し、セルキーに駆け寄る。イリスを確認したセルキーは、何故ここに来たのか不思議に思いながらも安堵の表情を浮かべる。

「イ……リス……？　ど……して……？」

「ラッキーさん達に頼まれて……って、今はそんな事よりほら、これを食べて……」

イリスはセルキーにチェリークッキーを差し出す。セルキーは差し出されたクッキーを食べて少し元気が戻ったのか、ふらつきながらも立ち上がった。

「うっ……くう……た、助かったよイリス」

「気にしないで。それより、まさかこいつがハヌイおじいさんの言ってた『冬の魔王』ビントーなの？　どうして外に……」

「……トクって『アガシュラ』が雪女たちと、アタシの両親を殺して封印を解いたんだ……こいつはアタシたちの魔力で封印されていたんだ……そのせいで……父さん達は……っ！！」

「っ!？」

イリスがセルキーの手元に視線を移すと、そこには彼女の両親と思われるアザラシの毛皮が握りしめられていた。セルキーも自分と同じように両親を『アガシュラ』に……イリスの身体から、とめどない怒りがあふれてくる。

「封印を解くためになんて事を……許せない。絶対に許せない！」

怒りを露わにしたイリスが弓を取り出す姿を見て、ビントーは腕を復活させながら昨日トクに言われた事を思い出したように声を出す。

『銀髪の弓使い……ぬうああるほど、お前がトクちゃんの言ったたデル族の末裔かあ。思ってたよりは可愛いが、あいにく好みじゃねえなあ。死・ん・で・ちょ!』

ビントーは左腕にまるでハリネズミのように無数の氷柱を生やすと、イリス目がけて飛び道具の様に投げつける! イリスはその氷柱を1本1本確実にかわしていくが、防寒着に1本突き刺さり、イリスの動きを封じた。

「くっ……」

『貰ったあああああっ!』

ビントーが右腕から巨大な氷の剣を取り出し、イリスめがけて容赦なく振り下ろす! 一瞬の間をおいて、鈍く重い音が辺りに響き渡り、地面に積もった雪が霧の様に辺りを包む……  
・両親のみならず、目の前で友人……イリスが消えた事でセルキーの瞳から涙がこぼれ、その現実を受け止めたくないために頭を両手で抱えて絶叫する。

「……っ!?! 嘘だ。うそだあ……もう止めてくれ、イリスを……イリスを返してよおおっ! イリスウウウウウッ!!!!!!」

『又ウァ〜〜〜ハッハッハッハッハッハァ!! デル族死留めたりいいいい……あ? あらん?』

「……?」

ビントーが不思議そうに声をあげて首を傾げるを見て、セルキーの瞳から涙が止まる。霧の様に散った雪が消えたその先に……虹の光を纏ったイリスがそこに居たからだ。

イリスは間髪、防寒着を脱いでビントーの斬撃を避けていた。ビントーはチッと舌打ちしたが、すぐにニタァと不気味な笑みを浮かべる。

『又ウァッフフ……なかなか良い〜い格好じゃないか! だが、そんなに寒そうな格好



してたらお腹冷やしちゃうぞお！』

ビントーはそう言うと、左腕に冷気を集めてイリスに向かって吹きつけた。普通の人間なら一瞬で凍りつくほどの冷気・・・だが、イリスはその冷気をもものともせずビントーの懐に潜り込み、一気に飛び上がると弭（はず：弓の両端部）に備え付けられていた槍のように鋭い黒い突起物でビントーの片目を貫いた！

片目を貫かれた痛みを耐えかねて、ビントーは片目を押さえて絶叫する。

『ギャァァァアアアッ！！ やるじゃねえか畜生め。惚れ直しちまったぜえデル族の小娘え・・・・・・・・』

「そんな冗談通用すると思ってるの？ 次はそっちの目を潰すわよ！？」

『フン！ 俺っちユーモアのない奴あ大嫌いだ。それはともかくとして・・・・・・・・まだ封印が半分しか解けてない俺っちに、お前の相手は分が悪すぎるなあ・・・・・・・・』

状況を不利と見たビントーは潰された目を復活させると、次の瞬間には吹雪に姿を変え、イリスたちの周囲に雪ダルマの魔物スノーマンを召喚する。

『雪ちゃん達い、足止めは任せたあ。あ、そっちのデル族と・・・そこにいるピンクの毛玉はぶっ殺してかまわんがあ、その氷雪の民は俺っちの大事なコレクションだあ。くれぐれも傷つけるなよ』

「！（ビントーの命令を受けて張り切っている）」

「ぎゅっ！？ らいらいらい～～！」

「待ちなさい！ どこへ行くつもり！？」

『ぬうあに・・・・・・・・ちよっくら氷雪の民の集落潰して封印を弱めるだけよ。もう少し封印がとけりゃあお前なんざ敵じゃないんでねえ』

「なっ！？ させるかよっ！！」

ビントーの目的を聞いて止めようとする二人だったが、ビントーの命令を受けたスノーマンが雪玉を投げつけ、イリス達めがけての突進などをして彼女たちを妨害する。

その様を見ていたビントーは大声で笑いながら、他の魔物をひきつけて氷雪の民の集落へと向かっていった。

『ヌウァハッハッハ！ じゃあなガキ共！』

「待ちやがれ！ くそっ、邪魔な雪ダルマめ・・・・・・・・」

「セルキー、プリちゃん連れてここから下がって！ 一気に決めるわ！」

「お、おう！」

イリスの言葉に従いセルキーがイリスの後ろに下がると、イリスは上空に向け1本の矢を放つ

。

「?（不思議そうに空を見上げる）」

「ジェノサイドレイン!!」

「!?（慌てて逃げ出そうとするそばから砕かれていく）」

空に放たれた1本の矢が、無数の矢の雨と化してスノーマン達を襲い、粉々に砕いていく。やがてその虐殺の雨が降り止むころには、スノーマン達の姿はなく、その跡にはただむき出しの地面だけが残っていた。

普段のイリスからは想像できない恐ろしい技をその目で目撃して、セルキーとプリちゃんはたまらず震えあがる。

「うわぁ・・・・・・・・えげつねえなイリス・・・・・・・・」

「きゅうううううっ・・・・・・・・（ブルブル）」

「そんな事を言ってる場合!? 早くこの事を皆に知らせなくちゃ!」

「わ、分かってるって! 最短距離で行くからちゃんと付いてきなよ!」

「うん!」

ビントーの野望を阻止するため、イリスとセルキーは集落へと駆けだしていった。

——氷雪の民の集落。

イリスたちとビントーとの死闘などつゆ知らず、家の外に出ていたチョーキーとラッキーが、早く帰ってこないものかとイリス達の帰りを待ちわびていた。

「お姉ちゃんたち遅いなあ～何してるんだろう」

「そう慌てるでないのお、チョーキー・・・・・・・・ん? なんじゃ、急に空が・・・・・・・・」

突如として空が暗くなり、次の瞬間には激しい吹雪が巻き起こる。突然の吹雪に氷雪の民達が慌てる中、高笑いをあげてビントーと魔物達が姿を現した。

「きゃああああ!？」

「なっ、なんだあれは!？」

「ま、魔物がこんなに・・・・・・・・なんで!？」

「お、おじいちゃん・・・・・・・・怖いよお」

「心配するでないチョーキー。じっとしてなさい、じっとのお・・・・・・・・皆の者、しっかりせんか! 戦えるものは武器を持て!」

長老ラッキーの号令を受け、氷雪の民達は冷静さを取り戻して一斉に武器を取り出す。その様を見て、ビントーは拍子抜けしたと言わんばかりに爆笑し始めた。

『又ウア・・・・・又ウアハハ・・・・・又ウアハハハハ・・・・・又ウアハハハハハハハハ！！』

こりゃあ傑作だ。アイスエッジも作れなくなってるたあ、ずいぶん落ちぶれたなあ氷雪の民共。800年も経つとそこまで落ちぶれちゃうものなのかあ？ ああ？』

「・・・・・・・・っ！？ 貴様、まさかビントー！？ なぜ、ここにいる！？ どうやって出てきた！」

『フン！ 貴様らには答える必要はないな。ミノちゃん、ウルフちゃん！ 殺っちまいなあ！！』

「ガルルルルル！」

「ブモ` オオオオーッ！！」

ビントーの合図を皮きりに魔物たちが一斉に氷雪の民たちへ襲いかかった！

最初は応戦していた氷雪の民達だったが、魔物達の攻撃に徐々に押され始める・・・・・・・・敵との戦力差は明らかに絶望的・・・そう判断したラッキーは声を張り上げ叫んだ！

「皆の者引け！ そして海に飛び込め！ 如何に奴が冬の魔王と呼ばれていようと、深海までは追ってこれぬはずじゃ！」

『又ウアハハハ・・・・・確かにその通りよ。小賢しい爺め、その挑発に乗ってやろう・・・・・・・・お前等あ！ 鬼ごっこの始まりだあ、ただああし・・・・・・・・そいつらを一匹たりとも逃すんじゃねえぞ！』

ビントーは楽しげに笑いながら、魔物たちに指示を出す。一斉に襲いかかる魔物達から逃げようと我先に海へ逃げる氷雪の民達。その騒ぎの中、ラッキーはマリヌの髪飾りを落としてしまう。それに気付いたチョーキーは踵を返すとその髪飾りを拾いに行ってた。

「！？ 何をしているチョーキー！ 早く海へ！」

「ダメっ！ あれはマリヌさんからもらった大事なものなんですよ？ だったらぜったい失くしちゃだめなの！」

「やめろチョーキー・・・・・・・・チョーキー！」

「グルル・・・・・・・・ギャウン！」

「ええい魔物共め、邪魔をするな・・・・・・・・」

ラッキーは周囲を取り囲むシルバーウルフに槍を構えて威嚇する。その一方で、チョーキーはマリヌの髪飾りを拾って安堵のため息をついていた。

「ふうー・・・・・・・・よかった、お爺ちゃんの宝物傷一つないや」

『ほおおお・・・？ ぬうぁあんだそれは？』

「え？ きゃあああああっ！」

「チョーキー！！」

いつの間にかチョーキーの目の前に現れたビントーが、興味深々と言った感じでチョーキーを鷲掴みにし、その髪飾りを眺める。

「うあう・・・・・・・・く、苦しいよお」

『ふむふむ・・・・・・・・ぬうぁある程お、こいつぁデル族の技術で作られたものかぁ・・・・・・・・どおれ小娘え、そいつを渡しなァ？ 渡せば命までは取らんでやらん事もないぞ？』

「嫌っ！ これはイリスおねーちゃんにあげる大事な宝物なの！ あなたなんかにはあげないんだからっ！」

『イリスウ・・・？ あぁ、あのデル族の小娘かぁ。そおかぁ・・・・・・・・大事なものなのかぁ・・・・・・・・』

「せいっ！ おのれビントー・・・・・・・・チョーキーを離せい！ 狙うならワシにしろ！」

『チョーキー・・・？ 又ウァハハハ。そうかそうか、お前があのプリティガールの妹か。んん～姉妹そろって良い～いねえ・・・・・・・・いいだろう爺。あのプリティガールに免じて離してやろうじゃないか、お前の命も取らずにな』

「ほ、本当か・・・！？」

『ああ離してやるとも。ただぁし・・・・・・・・このガキをこの場で氷漬けにした後でなァあああっ！』

「！ うわああああああああん！ やめて、やめてよおおっ！」

「！？ ふ、ふざけるなっ！」

『又ウァハハハハ！ 本気よ本気。どうせこのまま生きてって皺くちゃになって死ぬんだ。それならいっそ可愛いころのままで保存してやろうってんだ。俺っちやさしいだろお・・・・・・・・？』

「うっ、うわああああん！ お姉ちゃん助けてええええっ！」

『ハッハッハッハ、いい悲鳴だァ！ そおれそれ、凍っちまいなァ！』

「やめろ、やめてくれえええっ！」

ビントーはラッキーとチョーキーを弄び、それにも飽きたのかチョーキーを凍らせようと今まさに腕に力を込めようとしたその時だった。

ビントーの背後からセルキーが飛びかかり、ビントーの腕めがけて槍を振りおろす。その一撃で再度ビントーの腕が砕かれた。

「この野郎！ チョーキーを離せえええええっ！！！」

『！？』

「お姉ちゃん！！」

「大丈夫かチョーキー？ どこか怪我してないか？」

「うっ・・・うわあああん！ 怖かったよお・・・！！」

「待ってろ。このまま祖父ちゃんのところまで突っ走るからな！」

ビントーの腕を砕いたセルキーは、そのままチョーキーを抱えて長老のもとに駆け寄る。一方、ビントーは腕を再び生やすと、スノーマンを退けた事に驚いたように声を上げた。

『ほお、俺っちの雪ちゃん達を倒すとはやるじゃないか。だが、お痛もそこまでよプリティガール！』

「待ちなさい！ あなたの相手は私よ！」

『？』

ビントーが振り返ると、そこにはセルキーの後を追って現れたイリスが弓を構えて待ち構えていた。ビントーはとても嫌そうにため息をつくといリスの方へ身体を向き直して彼女と対峙する。

『デル族の小娘え・・・今いいところなんだ空気読めえい！ それにだ。さっきは油断しちゃったが、そんなちっぽけな弓で、本気で不死身の俺っちを倒せると思ってるのか、笑わせるう！』

「ええ思ってるわ。あなたの弱点なんてお見通しよ！ その氷の身体で・・・この炎を喰らえばどうなるかしら？」

イリスがそう言い放つと矢に魔力が込められ、矢を介して巨大な火の鳥がビントーの前に現れる。その火の鳥を見てビントーはたまらず悲鳴をあげた。

『馬鹿、やめろ！ そんな卑怯な・・・やめろ、やめてくれえい！』

「いいえ！ あなたは絶対に許さない。セルキーの両親、雪女の皆・・・その命を犠牲にして嘲笑っているあなたは絶対に許せない！ 多くの命を犠牲にした報いを受けなさい！ 『ゴッドバードフィニッシュ』！！」

イリスの怒りが昂るのに比例して、火の鳥の炎が激しく、大きく揺れる・・・そして、イリスが弦から手を離すと、火の鳥と化した矢がビントーに雄たけびをあげながら襲いかかった！

火の鳥は炎に姿を変えると、まるで覆いかぶさるようにしてビントーを炎で包んだ。炎を浴びせられてたまらずビントーは絶叫する。

『ヌゥァアアアアアア！？』

「やった、イリスの勝ちだ！」

「イリスおねーちゃんすごお〜い！」

「なんと・・・・・・・・・・ビントーが苦しんでおる！」

「すげえ・・・・・・・・あの子すげえ！」

「これで終わりね・・・・・・・・」

『・・・・・・・・ぬうああんちゃってええっ！』

「「!？」」

先ほどまで苦しんでいたビントーの体から突然激しい炎が噴き上がり、ビントーの周りを包んでいたイリスの炎を弾き飛ばした。そして、先ほどまでの氷の身体とは全く間逆の・・・・・・・・灼熱の炎の化身と化したビントーがイリスに熱波を浴びせて襲いかかる。

「熱っ・・・・・・・・！ そんな、馬鹿な・・・・・・・・一体どうなってるの!？」

『ヌゥァハハハハハハハ！ アガシュラをなめるなよ小娘え。冬の魔王ってのはブラフ！ フェイク！ 嘘っぱちのミスリィイイイド！ 俺っちは本来【熱のアガシュラ】なのよ。

絶対零度からセ氏数千度・・・・・・・・熱を自在に操るのが俺っちさあ。ヌゥァハハハハハ、どうやら俺っちを氷のアガシュラと間違ってお前達は語り継いでたみたいだなあ。

考えても見ろ。水属性の魔物を封じるのに、水属性をぶつける馬鹿がどこにいる？ 下手をすればその魔力でより強力になるだけじゃないか。アグリッパは氷雪の民と雪女の水の魔力を利用して、俺っちの発熱能力を奪って封印したあ・・・・・・・・それが真実さあ。

そして、さっきのお前の焼き鳥ちゃんの炎で俺っちのリハビリは無事完了・・・・・・・・今この瞬間に、俺っち念願の発熱能力が戻ったってわけよ・・・・・・・・残念だったなあデル族の小娘ええ？』

「そ、そんな・・・・・・・・ありえない・・・・・・・・」

『お前がどんなアガシュラを倒して来たかしらねえが、俺っちみたいなのが本来の意味での【アガシュラ】だあ・・・・・・・・お前達の理解を超えた、理不尽にして絶対の存在、それが【アガシュラ】よ！

俺っちを熱くさせてくれたお礼だデル族の小娘。褒美をくれてやろう・・・・・・・・さあ、たあっぷりと味わいなあ！』

そう言って、ビントーが雄たけびをあげると、たちまち強烈な熱波が辺りを包み、イリスと氷雪の民達・・・・・・・・そしてビントーに従っていた魔物達・・・・・・・・敵味方を問わずにその炎は襲いかかった。

「うわあああ！」

「きゃあああっ！！」

ビントーの熱波を受け、一気に静まり返る集落。先ほどの熱波を受け、皆うめき声をあげていた。ビントーは深いため息を吐きながら、チョーキーをかばって傷だらけのセルキーを見つめる。

「くっ・・・・・・・・痛う・・・・・・・・」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん!？」

「チョー・・・・・・・・キー・・・・・・・・無事ですか・・・・・・・・ぐうっ!!」

「うわああああん! お姉ちゃん、しっかりしてえ!」

『はあ・・・・・・・・せっかくのコレクションが台無しになっちまったなあ』

「チョーキー! セルキー! おのれえ・・・・・・・・よくもワシの孫娘達を・・・・・・・・」

ビントーがつまらなそうに指をパチンと鳴らすと、セルキー達の周りに生き残った魔物達が集まる。

「くっ・・・・・・・・」

『ざんねんだがあ・・・・・・・・もう、お前には俺っち興味がないのよ。あの時氷漬けにしていればよかったと本当に後悔してる』

「や、止めなさいビントー・・・・・・・・」

『止めないねえ・・・・・・・・最後に言う事はあるかいプリティィガール?』

「へっ・・・・・・・・イリスに倒されちまえ! このアガシュラヤロー!」

『ヌウァハハハ、アガシュラヤローか。良い〜い言葉だあ・・・・・・・・ミノちゃん、ウルフちゃん、殺っておしまいいいっ!』

ビントーの合図で魔物達が一斉にセルキー達に襲いかかる! その一瞬の出来事の中に、イリスは叫び声をあげ、ビントーは高笑いをあげ、セルキーはチョーキーを庇って目を閉じた。

そして、牙と爪が肉を貫く音が響いた

「・・・・・・・・?」

暫く経っても何も起きない、不思議に思いセルキーが振り返ると、そこには無数の魔物の攻撃を受けとめながら、今にも事切れそうなラッキーの姿があった。

「じ、祖父ちゃん!!」

「おじいちゃん!? うわあああん! 嫌だあああああっ!!」

『馬鹿な、一体あの老いぼれのどこにそんな力が・・・・・・・・』

「はあ・・・・・・・・はあ・・・・・・・・ワシを見くびるなよビントー。これでもこの氷雪の民の長。仲間を、家族を守るためならこの程度の痛みなど・・・・・・・・ぐっ」

「嫌あっ! おじいちゃん! おじいちゃん!!」

「それとも一つ！ アグリッパ殿はワシらをここに縛り付けたのではない……強き魂の力を持つワシらならビントー……貴様を封じられると信じ、託し、願ってこの世を去ったのじゃ！」

『ヌウァフフ……貴様がそう思いこみただけではないのかあ？ まあ、仮にそうだったとしてもだ……今のこの様はぬうぁあんだあ？ 俺っちを止める奴ぁもうこの世には居ねええんだよ！』

「いや、この目の前に居るイリスさん、セルキー、チョーキー……今を生きてる若き者達が居る限り、この世界が貴様ら『アガシュラ』の思い通りになると思うなっ！」

「ラッキーさん……」

「祖父ちゃん……」

「ひっく、おじいちゃん……」

「セルキー、チョーキー……お前達は強く生きるのじゃよ。先に……天国で……お前達が、エリアスの者と再び手を結ぶ日を……楽しみにしてるぞ……」

『フン！ ぬうぁあにやってるお前等、さっさとそのおいぼれを……！？』

ラッキーは最後の魔力を振り絞って、自身諸共魔物達を氷漬けにしていく。その様を見て、セルキーとチョーキーは叫び声をあげる。

「やめろ祖父ちゃん！ やめて！」

「おじいちゃああん！！」

「ただでは死なぬ……こ奴らも道連れじゃ！」

その言葉を最後に、ラッキーは魔物達と共に氷の欠片となって、まるでダイヤモンドダストの様に最後の輝きを残し……空中に霧散した。唯一、頭にかぶっていたアザラシの毛皮だけがゆっくりと地面に落ち、その後には何も残らなかった……。

セルキーもチョーキーも、イリスも、他の冰雪の民たちもその光景を見て絶句し、涙を流していた。そんな中、ビントーの笑い声だけが耳触りに響く。

『ヌウァハッハッハ！ こいつぁ泣かせるねえ、美しい家族愛……それをも超えた一族愛かあ？

だあがぁ、結局は無駄死にだなあ。まったくもって無意味にも程がある……俺っちにかかればお前達を皆殺しにする事なぞ……』

「……黙れ……」

『？ 何か言ったかプリティガール？』

「祖父ちゃんの死を侮辱したことを謝れ……祖父ちゃんの死を無駄死にだって言った事を取り消せえっ！ お前だけは絶対に、絶対に許さねええええっ！！！」





重いアタシの『魂』が・・・アタシの『想い』が詰まってるんだ！ 手前なんかの安っぽい魂なんかには、アタシの『魂』は負けるつもりなんか無えんだよっ！！」

そう啖呵を切って、ビントーに向かって短剣を突き立てるセルキー。だが、ビントーは即座に自らの身体を氷に変化して、その攻撃を受けとめた。冷気を纏ったビントーの前に、アイスエッジの攻撃は届かなかった。

「くっ・・・・・・・・」

『無駄無駄あ！ 俺っちは熱のアガシュラだって言っただろ？ 炎も氷も効かねえよ！』

「それじゃあこれならどう！？ 『ゴッドバードフィニッシュ』！！」

『！？』

セルキーと反対方向から、イリスが再び火の鳥を放つ！ すると、ビントーは身体の半分を炎に変換し、攻撃を受けとめた。

イリスとセルキーはビントーから一端距離を開け、息を整える。対して、ビントーは余裕と言った表情でニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべていた。

『又ウァハッハッハ！ 無駄無駄無駄あ！ 俺っちこう見えて器用なんよ』

「くそっ。このアガシュラヤローめ・・・・・・・・」

『お前の事を見くびり過ぎていたなあ・・・・・・・・今までの失言は取り消すぜえプリティガール。またまた俺っち惚れ直しちゃったよ。どうよ、俺っちと一緒にアガシュラやらねえかあ？ お前ならトクちゃんも超えるはずさあ！』

「お断りだね！ 死んでもお前等アガシュラヤローになってたまるか！」

『又ウァハッハッハッハ！ いいのか？ このまま戦ってもお前達は俺っちに勝てないんだぞ？

今のうちに謝るなら許してやるんだがなあ？』

「ざっけんな！ けど、一体どうすれば・・・・・・・・」

セルキーが色々な策を思案する中、突如イリスがセルキーの手を掴む。不思議に思ってセルキーがイリスの方を向くと、イリスは強い瞳でセルキーを見据えていた。

「イリス・・・？」

「セルキー。お願い、私に力を貸して！」

「力を貸すって・・・ど、どうやって？」

「氷も炎も単体でぶつけてたら、あいつには効かない・・・・・・・・だから、私の『ゴッドバードフィニッシュ』と、あなたのありったけの冷気魔法を融合させて同時にぶつけるの！」

イリスが真顔でそう言うと、セルキーは戸惑った様な表情を見せ、ビントーは炎と氷の身体のまま大爆笑する。

『ヌゥァハハハハハ！ 血迷ったかデル族の小娘。確かに発想はいい、万に一つ俺っちに勝てる可能性があるとするなら、その炎と氷の魔力を融合させるって方法しかないだろうよお。

だあがぁ、そんな荒技・・・素人の付け焼刃でできると思ってるのかぁ？ あの大魔導師アグリッパでさえできなかったのだぞお？ できるのはこの世界でただ一人、【熱のアガシュラ】である俺っちくらいなもんさ！』

「・・・・・・・・悔しいがあいつの言う通りだ。そんな事すればこっちが・・・・・・・・」

「大丈夫、私を信じて！ 私たちならやれる！」

「でも・・・・・・・・」

「あんな奴には負けないって言ったのはセルキーだよ！？ 私だって負けるつもりはない！ いいえ、絶対に負けるはずがない！ 私たちならきっと勝てる・・・だからお願い、一緒に力を合わせて！」

イリスは強い瞳でセルキーを見据えてそう叫ぶ。最初は戸惑っていたセルキーであったが、何か吹っ切れたのか、ニッと笑ってイリスに応えた。

「・・・・・・・・分かった、イリスを信じるよ。どうせここでやらなきゃ死ぬんだ！ だったら破れかぶれででも、まぐれででもいいや・・・・・・・・魔力融合でも何でもやってやらあっ！」

「ふっ。それでこそセルキーだよ！ じゃあまずは魔力を限界まで引き出して・・・・・・・・」

「おうよ・・・・・・・・」

『・・・・・・・・俺っちの忠告を無視かぁ？ 俺っちの親切を無駄にしやがって・・・・・・・・このお馬鹿さん共め。

無駄なあがきなんだよお！ 付け焼刃で相反する魔力を融合なんてできるはずがないだろがあっ！』

ビントーの言う事も尤もだったが、セルキーはそのまま目を伏せ、イリスを信じて魔力を限界まで引き出す。暫く魔力を出し続けているうちに、セルキーはある事に気がついた。目を閉じているはずなのに、イリスの身体から虹色の光が発せられるのが手に取る様に分かっていたのだ。イリスも同様にセルキーの魔力を察したのか、その虹色の光が二人の周囲を包み、巨大な球状の結界の様に広がって二人の魔力が膨れ上がっていった。

一方のビントーもその魔力を視認することはできないが、そのただならぬ気配に気づき、あり得ないと言った表情でうろたえていた。

『・・・・・・・・っ！？ ぬうぁあんだと！？ なんだこの嫌な気配は・・・・・・・・まさか、本当に魔力の融合を・・・・・・・・ヌゥァアアアッ！ これでも喰らえい！』

危機を察したビントーは炎と吹雪を身体から巻き起こし、イリス達目がけて放った！ だが、

二人の強力な魔力が結界となってその攻撃は無効化され、逆に一層二人から強く放出される魔力に、ビントーは思わず狼狽する。

『ヌゥァアッ！？ ば、馬鹿な・・・・・・・・ありえん。俺っち以外で冷気と灼熱を同時に操るなど・・・・・・・・ま、まさか。この世界に生きる他の種族と力を合わせる事で、俺っち達アガシュラをも凌駕するとでも言うのか・・・・・・・・。』

【力を束ねる】・・・・・・・・これが、これこそがデル族の力だとでも言うのかああああっ！？』

「「はあああああっ・・・・・・・・！」」

『認めん！ 俺っちは絶対に認めんぞ！ この力はアガシュラのものだ！ 俺っただけに許された力だ・・・・・・・・それを証明してやる！ 喰らえい！ これが本物の融合魔法だ！』

ヌゥァアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！』

ビントーは炎と吹雪を掌に集めると、二つの魔力を融合させ、紫色の球状の魔力の球を二人にめがけて一気に解き放った！ 一方のイリスとセルキーも、互いの魔力を融合させ、呼吸を合わせて魔力を解き放つ。

「ゴッドバードフィニッシュ！！」

「セスティナ！！」

イリスとセルキー、それぞれの放った魔力が融合しあい、蒼い炎を放つ不死鳥となってビントーに襲いかかる！ 蒼い不死鳥は、迫りくるビントーの放った魔力を口を開けて飲み込むと、その魔力を吸収して巨大化し、そのままビントーへ雄たけびをあげて襲いかかる！

『ばっ、馬鹿な！ 馬鹿ぬうあああああっ！？』

蒼い不死鳥はビントーの身体を貫き、大きな風穴を開けた・・・・・・・・同時に、ビントーの身体に蒼い炎が至る個所へ燃え移り、燃え移った炎はたちまちビントーの身体を融かし始める。ビントーは今までにないほどに苦しんで、絶叫しながら炎を振り払おうと身をよじらせる。

『熱い！ 寒い！ 焼ける！ 凍る！ 溶ける、溶けちまう！ 苦しい、苦しいいいっ！！』

し、死ぬっ！？ お、俺っちこのまま死んじゃう！？ 馬鹿な、不死身のアガシュラが死ぬっ！？

そ、そんなことぐあああああああああああっ！！』

断末魔の悲鳴をあげながら、ビントーの身体は空気に溶けるようにして消滅した。ビントーが消滅したのを見て、氷雪の民達からどっと歓声がわき起こった！

「はあ・・・・・・・・はあ・・・・・・・・祖父ちゃん、父さん、母さん・・・・・・・・仇は取ったよ」  
「やったね・・・・・・・・セルキー！」

なれない事をして疲れがどっと出たのか、イリスとセルキーはその場に座り込みながらも、互いに笑顔を見せてハイタッチを決めた。

終話：この魂をイリスへ・・・・・・・・

---

——ビントーとの戦いから数時間後。集落に面した海岸から、セルキーは祖父、父、母の形見と言える毛皮を海に沈めていた。チョーキーは今にも泣きそうな顔をしながら、花を投げ込み、イリスは手を合わせて追悼する。遠巻きに他の氷雪の民たちもすすり泣いていた。

「祖父ちゃん、父さん、母さん・・・・・・・・」

「ひっく、ひっく・・・・・・・・」

「どうか皆さん安らかに・・・・・・・・」

イリスの横顔を見ながら、セルキーは何かを決意するかのようになり、少し悲しげに声を出していた。

「なあ、イリス・・・・・・・・」

「ん？ どうかしたセルキー？」

「・・・・・・・・悪いんだけど、アタシやっぱイリスと一緒にいけないや。ごめん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そう」

二人はお互いの意図が分かっているのか、短いながらも納得したように答える。その様子を見て、チョーキーは不思議そうにセルキーに尋ねた。

「え？ お姉ちゃんどうして？ チョ、チョーキーなら一人でも平気だよ？ だ、だから・・・・・・・・イリスおねーちゃんと一緒にぼーけんに出ても平気だよ？ それに、チョーキー・・・・・・・・」

「~~~~っ！」

チョーキーが辛そうに声を出すのがたまらなかったのか、セルキーはチョーキーを抱きしめて涙を流していた。

「お、お姉ちゃん・・・？ ど、どうしたの急に？」

「・・・・・・・・お前を置いていけるもんか！ お前を一人ぼっちにさせてまで・・・・・・・・アタシは旅になんか出たくないよ！」

「えぐっ・・・・・・・・ひっ、ひっく・・・・・・・・うっ、ううっ・・・・・・・・うわあああん！ お姉ちゃんあああん！」

セルキーはチョーキーを優しく抱きしめながらそう叫んだ。姉の本心を知ってか、チョーキーも涙腺から涙をあふれさせ、大粒の涙を流しながらセルキーにしがみついて泣き始めた。

「うわあああん！ お姉ちゃん、もうどこにも行かないでえ！！」

「分かってるよ・・・・・・・・分かってるからもう・・・・・・・・うっ、ひっく・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

イリスは静かにほほ笑むと、チョーキーの頭を優しくなでてすっと立ち上がった。

「そうだよね・・・・・・・・離れ離れは寂しいもんね・・・・・・・・分かった。それじゃあ、私はこのまま・・・・・・・・」

「あっ！ ちょっと待ちなよイリス！」

「？」

「・・・・・・・・これを」

セルキーはイリスを引き留めると、先ほどのビントーとの戦いで使用していた自らのアイスエッジを彼女の目の前で再び作りだし、イリスに手渡す。

「これはあの時の・・・・・・・・どうして！？ これはあなたの『魂』そのもので・・・・・・・・っ！」

「そう・・・・・・・・それはあたしの『魂』がこもった刃だ。アタシにはチョーキーと、集落の皆っていうかけがえのないものが出来ちゃったからもうここを離れる事は出来ない・・・・・・・・だけど、いつだってアタシの『魂』はそこにある！

だから、そいつをお守り代わりに持って、旅を続けててくれよ！ その方がアタシは嬉しい・・・・・・・・」

「セルキー・・・・・・・・！」

イリスはセルキーから受け取ったアイスエッジを強く握りしめると、腰もとに備え付けられてはいるが普段使う事のない、ただの飾りでしかなかった短剣の鞘の中にアイスエッジを納めた。

少しだけ増えたその重みが、心地よく感じる・・・・・・・・そう感じたイリスは、セルキーに最初に出会った時の様な笑顔を見せた。

「・・・・・・・・分かった。大事に、大事にするね。そして、アガシュラとの戦いが終わったら必ず返しに来るわ！ 約束よ！」

「へへっ・・・・・・・・そんな時は盛大に歓迎してやるよ！ それじゃあそれまでに、アタシは少しでもエリアスの人たちと交友を取り戻せるように頑張ってみるよ！ 約束だ！」

セルキーもイリスに対して満面の笑みを浮かべ、右手を差し出した。イリスも右手を出すと、二人は固い固い握手を結び、それぞれの決意を果たすために頷いた。

「あっ、そうだ！ チョーキーからもイリスおねーちゃんに渡すものがあったの！」

その姿を見ていたチョーキーは、何かを思い出したかのように、ポーチの中からマリヌの髪飾りと、セルキーに渡すはずだった小さな貝殻でできたネックレスを取り出す。

その綺麗な飾りを見て、思わずイリスは声を漏らす。

「うわあ、綺麗・・・・・・・・」

「あのね、こっちの首飾りは本当はお姉ちゃんに渡すはずだったの。でも、お姉ちゃんもうここから離れなくなっちゃったから、代わりにイリスおねーちゃんに持ってて欲しいの！」

それからね、こっちはおじいちゃんが大事にしていた、マリヌさんの髪飾りだよ！」

「！？ お婆ちゃんの！？」

「うん。マリヌさんとのぼーけんが終わった時にもらった大切なものだって、お爺ちゃん言ったの！ だからお願いイリスおねーちゃん！ これも持って行って！」

「・・・・・・・・分かったわチョーキー」

イリスはチョーキーから貝殻のネックレスとマリヌの髪飾りを受け取り、それぞれのアクセサリーを身につける。

「・・・・・・・・可愛い。大事にするね、チョーキー」

「・・・・・・・・っ！ うんっ！ あ、でも貝殻のは壊れやすいから、普段は大事にしまっておいてね！ 壊れちゃうの見ちゃうとチョーキー泣いちゃうからね・・・・・・・・？」

「うふふ、分かったわ。後でラフィさんに大事に保管するよう言っておくわ。でも、もうしばらくは付けててもいいよね？」

「もちろんだよ！ だってイリスおねーちゃんとっても綺麗だもん！」

「・・・・・・・・それじゃあ、そろそろ・・・・・・・・」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

「・・・？ あなた達・・・・・・・・」

再び出発しようとしたイリスを引き留めたのは、先日遠巻きにイリスを見てはヒソヒソと声を掛け合っていた氷雪の民の若者達だった。一体どうしたのだろうと不思議に思っていると、若者たちはイリスの前にズンズンと重い足取りでやってきては、少し恥ずかしそうにもじもじした後、イリスも見た事のない珍しいものを色々とイリスに見せるのであった。

「こ、これは・・・？」

「こ、これは海を渡ったところにある変なタコの神殿に居たタコ。サザエをえさにしてるから、すっげえ美味いんだ！ 腹が減ったら食ってくれ！」

「は、はあ・・・」

「ふふん。そんなの貰ったって女の子は喜ばないわよ！ 私からはほら、このキラキラ綺麗な金



属の欠片をあげるわ。マスクをしている変な猫達からかっばらってきた奴の一部よ。私には使い道が良く分からないけど、何かの武器かアクセサリにしようといいわ」

「ど、どうも・・・」

「お、俺はその神殿にいた凄く気持ち悪いタコからもらった変な紙だったの！　なんて書いてるか分かんないけど・・・多分、魔除けだったの！　きっと『アガシュラ』から守ってくれるはずだったの・・・多分」

「・・・・・・・・だ、大事に持っておくね。それにしても一体皆どうして」

「あーっ！　ずるいぞお前等、それならこっちは自家製のケモノプリリンの燻製さあ！」

「え？」

「馬鹿だねえあんたら、こういうときはエリーっていうエリアスのお金が一番に決まってるじゃないか！　ほら、雪原でちまちま拾った奴だから少ないけどもらってくれよ」

「ええ？」

「じゃあ僕はアオイチって国で重宝されている『コ・ンブー』の乾燥したやつを・・・」

「えええっ!？」

「パンツのスペアを！」

「ええええっ!？」

昨日までイリスに怯えていた集落の者たちが、我先にイリスにいいものを送ろうとイリスに詰め寄って、次々に贈り物をしようとする。

突然の事態にイリスが戸惑っていると、それを制止するかのようセルキーの怒声が響き渡る！

「ごるあああああ！　お前等、イリスがビビってんだろ。止めろよ！　それに、昨日まで近寄ろうとしなかったのにどういう風の吹きまわしだよ？」

「そ、そりゃあ昨日はそいつの事何にも知らなかったし・・・怖かったんだ。どんな人間かもわからなかったしさ・・・・・・・・」

「でも、その子は命がけで私たちがビントーから救ってくれた・・・だから、せめてものお詫びって奴よ」

「まあぶっちゃけ、俺たちまだ人間は信用してないっての。でもあんたは別！　あんたはセルキーだけじゃない、俺たち『氷雪の民』全員の命の恩人だったの！」

「あんたみたいなのが外にも少しいるならさあ、僕たちもラッキー爺さんの言っただけにさあ、人間と仲良くしてみよう・・・そう思ったのさあ。まああんたは『デル族』らしいけどさあ」

「・・・っ！　皆・・・・・・・・」

「そう言う事だから、近くに来る事があったら寄ってくれ、アンタなら大歓迎だ」

「ちょっとお、昨日までビビってたのに調子いいわねえ」

「なっ、そう言うお前だって・・・・・・・・」

「ぷっ、あははははっ！　なんだよ、お前等本当調子がいいんだから・・・・・・・・」

「セルキーまで・・・・・・・・ひどいぜ」

「えへへ、みんなイリスおねーちゃんの事だいすきになってくれてうれしいなっ♪」

氷雪の民達に囲まれ、彼らの意識が少しずつ変わった事にイリスが喜んでいたその時、どこからか彼女を呼ぶ声が木霊す。

「おーい、イリス～！」

「どこで道草食ってんのよお～！」

「・・・？ 誰の声？ いりすおねーちゃんの事を呼んでるみたいだけど・・・」

「この声はムーウエン！ それにジョエも！ ああ～皆心配してるよねえ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あれがイリスの仲間か」

「うん。私の大事な仲間だよ！」

「そうか・・・・・・・・それじゃあ早く安心させてやらないとな。っと、そうだそうだ。まだ渡すものがあったわ」

セルキーは思い出したかのように、ラッキーが残していたハヌイへの手紙を取り出してイリスに手渡す。

「祖父ちゃんはまだいないけど・・・祖父ちゃんの意志は私たちが継ぐ！ ハヌイって爺さんに会ったらそう伝えておいてくれよ」

「・・・・・・・・分かった。それじゃあ、もう行くね」

「ああ！ じゃあなイリス。またいつかここで！」

「うん！ 皆さようなら～っ！」

——氷雪の民たちの歓声を受けながら、イリスは再び冒険の旅へ出る。その懐に、新しい仲間の魂を携えて。